

# 鵜沼

久 久 比 奴 末

はまゆうと桜貝と

海光るわが故里

第 1 1 4 号

|                                                     |       |    |
|-----------------------------------------------------|-------|----|
| 鵜沼海岸雑筆                                              | 森 銑三  | 1  |
| 大正から昭和にかけての鵜沼通信事情                                   | 有田 裕一 | 5  |
| 越谷達之助と忍節子                                           | 岡田 哲明 | 16 |
| わたしの鵜沼の思い出 <2><br>お供から始まった江ノ島の釣り<br>— 江ノ島の変遷もふくめて — | 内藤 喜嗣 | 18 |
| Coffee Break                                        |       | 42 |
| 芥川龍之介の中国旅行と「手帳」                                     | 神谷 祐太 | 44 |
| 『鵜沼を巡る千一話』より<br>全国に鵜を追う—クグイ・クグ地名分布とその特色             | 渡部 瞭  | 46 |
| 今井達夫遺稿 ⑩<br>『プレイボーイ』(後篇)                            | 今井 達夫 | 50 |
| 活動の記録(平成28年12月~29年3月)                               |       | 61 |
| 編集後記                                                |       | 62 |

『新編相模国風土記稿』(天保12年、1841)に、「鵜沼村久久比奴末牟良」とあり、当時は“くぐいぬま”と呼んでいたことが分かる。

鵜沼を語る会 発行

# 鵜沼海岸雑筆

森 銑三

鵜沼海岸へ、東京から引越して来てから、二十年という歳月がとうに過ぎて、間もなく三十年になろうとしている。

鵜沼へ来て私のいたのは、五丁目の路地の奥の家で、その路地へ入るところには、昔ながらの茅葺の家が残っていたのだったが、そこに住む人が越して行ったら、早速取払われて、普通の住宅になってしまった。

茅家の前の東西に走る通りに沿うて、溝川が流れて居り、春になると若芦が萌え、夏から秋にかけては、カンナや犬蓼（イヌタデ）が伸びて、それらが風情をなしていたのであるが、その内に川がつぶされ、道が掘られて、自動車が引切りなしに往きかうようになってしまった。その川の埋められた翌年、堅い道路の土をもたげて、芦が芽を出したのには、甚だ傷ましい思いをした。以前の若芦の清新な感じを、今は見るべくもない。

初夏の頃に、朝家を出て海岸駅へ行くのに、わざと廻り道をして海岸に出て行くと、江の島を右手の正面に見るところの道より低い小流に、葦切（ヨシギリ）が鳴いているのが好ましかった。毎朝の廻り道を、私は楽しみにしていたが、その道も、年ごとに自動車の通るのが激しくなり、それにおびやかされたのであろうか、葦切はどこかへ行ってしまう、その声も今は聞かれない。行々子（ギョウギョウシ）行々子と鳴くその声は、俳趣の豊かなものだったが、それが聞かれなくなったのだから寂しい。

海岸の波打ち際に飛ぶ千鳥も、久しく見ない。あの小鳥達も、どこかへ行ってしまったのではあるまいか。

鵜沼の土地は、私には初めてだったのであるが、東京で識っていた西洋史の大類伸博士や、刀剣研究家の川口陟翁や、実業家で趣味人の外山知三翁や、故松岡静雄氏の夫人初子さん達が住んでお出でのところとして、喜んで鵜沼へ移って来たので、こちらへ来てからも、引き続いてその方々と入魂に願っていたのだったが、この二十余年間に、川口翁逝き、松岡夫人逝き、二三年前には大類博士も亡くなって、身边が俄かに寂しくなってしまった。

しかしこちらへ来てから識った人達もある。柳田国男翁の門下で、民俗学に精通せられている丸山久子さんを、来住間もなく松岡夫人を介して識り、それから



ずっと懇意に願っている。その丸山さんからは、この土地の旧事その他を何かと教えられている。

丸山さんについて、中西逸平さんを識った。中西さんは生え抜きの郷土人で、この土地だけでなく、神奈川県全体に互って精しかった。鵠沼にしながら、土地のこと、この界限一帯のことを私が何も知らぬのを憐れんで、せめて休日には、何とか暇を作りなさい。私が方々へ引廻して上げましょうと、親切にいわれていたのだったが、そのことには及ばぬ内に、中西さんも亡くなってしまった。

中西さんは書画の蒐集家でもあって、郷土関係のものでは、小笠原東陽の七言絶句の——たしか釣の詩だったろうか——出来のよい幅を所蔵せられていた。その外に物外和尚の達磨の図の、これもまたみごとなのをも見せて貰っている。その二点は、私の特に忘れかねているものであるが、氏の物故後、再見の機会を得ずにいる。

小笠原東陽は、藤沢教育史上に特筆せられてよい儒学者であるが、その人は昌平黌の出身で、仙台の岡鹿門などとも相識だったのだった。それで鹿門の晩年の著述『在臆話記』にも、逸聞の語られているものがあり、いつかその紹介を何かでしてもよいと思いながら、徒らに年を経た。『在臆話記』は、遠からず活字になろうとしている。東陽の研究に志のある人の一読を乞うこととしたい。

東陽よりやや古く、漢詩人大窪詩仏が藤沢へ来て歿している。この詩仏にも、私は関心を寄せながら、研究というほどのこともせずに、今日に至っているのであるが、白百合女子大学の雑誌『国文白百合』の最新号に、知友揖斐高氏が「詩仏年譜稿」というものを寄せられていられるのを、ついこの間読んで、その人のことが今また頭の中に往来している。詩仏の歿するその前後のことを知るべき資料の埋もれているなどは、どこかにないものか、そんなことが気にかかっている。

一昨年（昭和五十一年）の春、私は五丁目の家から、今の家に引越した。今の家は二丁目で、元の家より数町江の島寄りになる。新居は、お話にならぬほどの小さな家で、ただ四畳半の一間を、居間にも仕事場にも、何にもかにも使って、窮屈な生活をしている。しかしそれでも何とかなって行くところが、面白くも感ぜられる。場所は二三年前に出来たスカイマンションの裏手になるので、海岸へも私の足で数分で出られる。周囲は静かで、読むのにも書くのにも都合がいい。よし狭くとも現在の私はこのささやかな住いに落ち着いていたいと思っている。

序に前の五丁目の家の思い出を一二書添えて置こう。

前に書いた松岡初子夫人は野村靖子爵のお嬢さんで、乃木大将夫妻を、おじさ

ん、おばさんと呼んで、大きくおなりの人だった。それで一日夫人に家へ来ていただき、東京から柴田宵曲さんと呼んで、夫人の思い出話を筆記して貰った。そんなことをした。

それから、当時湯河原に住んでいられた三村竹清翁の勧めで、一日拙居で雑談会を催した。翁と、本鵜沼にお住いの香取秀真翁とを主賓に、前記の外山知三翁や、それからまた鵜沼にお出での各務鉦三翁にも出席を乞い、それから柴田宵曲さんその他にも来て貰って、それは賑やかな集まりとなった。しかしその後の数年間に、三村翁も、香取翁も逝き、柴田さんまでが亡くなった。独り各務翁の依然として健在なのを、せめてもの喜びとしたい。 [ 昭和 53(1978)年 ]

編集注：原文の旧かなづかいを新かなづかいとした。

出 典：『森銑三著作集 続編 第 15 巻』中央公論社刊

(中央公論新社ライツ管理部経由著作権継承者の転載承諾済)

#### ◆ 筆者略歴

森銑三（もりせんぞう 1895~1985）在野の書誌学者 歴史学者

愛知県刈谷市出身、工手学校中退、尾張徳川家蓬左文庫図書係、東大史料編纂所勤務、早稲田大学講師、『森銑三著作集・全 12 巻、別巻 1 巻』『森銑三著作集 続編・全 16 巻、別巻 1 巻』ほか著書多数 読売文学賞  
詩人田中隆尚（鵜沼桜が岡 3-17-23）が主宰する「ももんが」同人  
墓所は刈谷市正覚寺、分骨され鵜沼神明 3-4-37 万福寺にも墓がある  
鵜沼海岸 5-13-6 反町茂雄（弘文社）方に 1949~1976 年の間、鵜沼海岸  
2-17-4 に 1976~1985 年の間、居住した。

#### ◆ 文中人物

大類伸（おおるいのぶる 1884~1975）西洋史学者 文学博士 東北帝大教授

鵜沼松が岡 2-16-22 に 1944 年から居住

川口陟（かわぐちのぼる 1883~1964）刀剣研究家『定本日本刀剣全史』全 8 巻  
鵜沼海岸 7-13-3 に居住

外山知三（とやまともぞう 1879~1963）三井銀行取締役

鵜沼海岸 2-10-12 に居住

松岡初子（まつおかはつこ 1887~1962）松岡静雄夫人 当会会員故松岡喬は孫

1923 年山口紋蔵宅離れに一家で避暑、静雄のみ残って震災に遭遇した  
1925 年秋から鵜沼海岸 7-18-14 に居住

丸山久子（まるやまひさこ 1909~1986）柳田国男の愛弟子、民俗学者

鵜沼海岸 2-2-17 に昭和 3 年療養の為別荘入手、昭和 21 年春から居住

中西逸平（なかにしいっぺい 1895~1961）鶴見で醤油醸造

昭和 2 年、鵜沼海岸 3-10-22 に別荘建設、戦後より常住

香取秀真（かとりほつま 1874~1954）鍔金工芸家 東京芸大教授

本鵜沼 3-3-3 に居住

各務鉦三（かがみこうぞう 1896~1985）クリスタルガラス工芸作家

鵜沼海岸 7-18-21 に 1944 年から居住

柴田宵曲（しばたしょうきょく 1897~1966）書誌学者 歌人 東京に居住

三村竹清（みむらちくせい 1876~1953）書誌学者 篆刻家 湯河原に居住

＊

＊

＊

野口喜久子編『砂のいろ』（1975 年 法政大学出版局刊）は、野口の両親である  
松岡静雄・初子夫妻の遺稿に、親族、友人、神楽舎（ささらのや）で学んだ人達  
などの追想文を一冊にまとめた本である。

喜久子の追想「父のこと、母のこと」のなかで母、初子と森銑三、丸山久子と  
の交流について次のようにふれている。

——母の晩年は、鵜沼の尼寺によく通っていた。仏典だの仏閣めぐりだのには興  
味をもっていたようであった。私が年中あわただしくしていたものだから、森銑  
三様ご夫妻や丸山久子様には、ずい分めんどろを見ていただいた。丸山様は姉（雪  
子）と同級（府立第三高女）でもあり、柳田（国男、静雄の兄）のお弟子さんな  
ので、いろいろな面で母を喜ばせてくださった。——

## 大正から昭和にかけての

# 鵠沼通信事情

有田 裕一(会員)

近年はスマホの全盛時代である。仕事でも電車の中でも一人一人がスマホを手離せない時代になっている。

日本での近代的郵便業務の開始は明治4年、東京ー京都ー大阪間で開始され、その後、我々が今、便利さを享受している電話は、明治10年11月、横浜のパピア商会により英国から2台輸入されている。グラハムベルが電話を発明した明治9年のわずか1年後のことである。

翌明治11年模造に着手、この完成品が工部省へ納品された。その後、明治20年2月逓信省が創設され、お馴染みの「〒」マークが早くも制定された。130年程前のことである。その後、電話通信制度がどのように変化したか、「鵠沼」を中心に調べてみたい。

### 特設電話と普通電話

まず明治11年より横浜で電話線の敷設が開始され、12年後の明治23年に電話加入者の募集が始まった。その年の12月には東京ー横浜間で交換業務が始まり、この時点での加入者数は東京155、横浜42、計197であった。これが特設電話の「電話元年」で、この前年に1回線だけ東京ー熱海間に敷設され、1年間試験通話を行なっている。

警察、県庁、海軍などの官用電話は普通電話と呼ばれるもので架設費用は逓信省が負担するが、一般人が所有できる特設電話は電話組合を組織し架設費を組合が負担、架線も交換機も含めてである。特設電話制度は明治35年に制定され（逓信省令29号）、昭和7年まで続いた。

加入者の個人負担は電柱、交換機も含め購入するので加入者数が少ないと莫大な金額になり、鵠沼では当時の金額で一軒435円の請求書の記録がある。通話料は最初定額制で年額40円であった。ちなみに商家の店員の給料は1ヶ月4円、1戸建の家賃10円であった。そして、鉄道運賃は東京ー横浜間で上が75銭、下が25銭であった。

電話の登場は便利さのうえで画期的なものであったが、一方、個人負担が大きく加入者募集にも困難な面も多く、大阪の開設は明治 32 年になってしまった。

熱海と並んで著名人が住んでいた大磯、鎌倉、葉山は明治 34 年、片瀬は明治 41 年とこれらの地は全国的に見ても割りと早く開通した。藤沢局は明治 40 年 3 月、交換事務を開始。翌明治 41 年 6 月、交換業務を開始した。そのときの特設電話加入数は 33 だったが、昭和 3 年には藤沢局加入数は 317 になった。

## 鵠沼の郵便局

明治 4 年に日本ではじめて東京～大阪間で官営の郵便事業が開始された。明治初期の国の財政基盤が不安定な時期にあって予算的な制約があるにもかかわらず、わずか一年半で全国展開が実現した背景には、郵便取扱人を引き受けた各地の名士による、局舎の無償提供やわずかな手当での献身的な協力があったからである。それでは鵠沼における郵便局の状況をみてみよう。

**1 代目鵠沼郵便局** — 鵠沼海岸の東屋の正門右に、明治 40 年 1 月 1 日に開設された。東屋旅館内の郵便局は敷地 13 坪 5 合、建坪 9 坪 7 合で、電話業務にあたっては局舎が狭隘であった。そのため独立した局舎が必要になり、一般からの寄付金を募り鵠沼下岡 6660 に新たに郵便局をつくった。これが 2 代目になる。



鵠沼の 1 代目郵便局

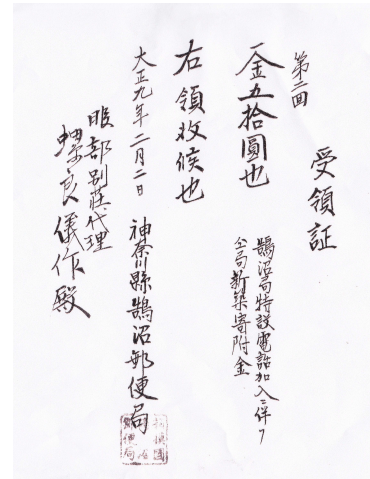


1 代目、2・3 代目郵便局位置

**2代目鵠沼郵便局** — 大正8年12月16日、鵠沼下岡 6660 番地、東仲通り(天金通り)に面した現在の井上邸北側の位置に2代目の郵便局が開設された。2代目郵便・電話局は敷地 84 坪、建坪 30 坪 5 合で、東屋内の1代目郵便局の3倍の広さになった。

特設電話加入申込み受付開始は明治 40 年3月で、4月6日に横浜―鵠沼双信電話線が新設された。しかしその13年後の大正9年8月1日にやっと電話交換業務が開始された。

電話業務が開始されても鵠沼での最初の加入者はわずか 42 であった。



鵠沼郵便局からの寄附金受領証

**3代目鵠沼郵便局** — 2代目の建物が大正 12 年関東大震災により倒壊したため、急遽同じデザインで同じ場所に局舎を新築した。これが3代目に当たる。東屋旅館内の建物が狭かったための2代目郵便局であったが、3代目になった郵便局の建物は震災前より小さめとなり、ポストは丸型の金属製になった。



2代目鵠沼郵便局



3代目鵠沼郵便局

**4代目鵠沼郵便局** — 昭和4年に小田急江ノ島線が開通、鵠沼海岸駅が出来、現商店街の人通りが増え、商店街内に郵便局の必要性が出て来た。そして地域のより多くの人々のふれあいを図るため、それまでの集会所(昭和7年築)に代わり昭和11年3月、大規模な集会所(南海岸クラブと称した)がつけられた。新集会所



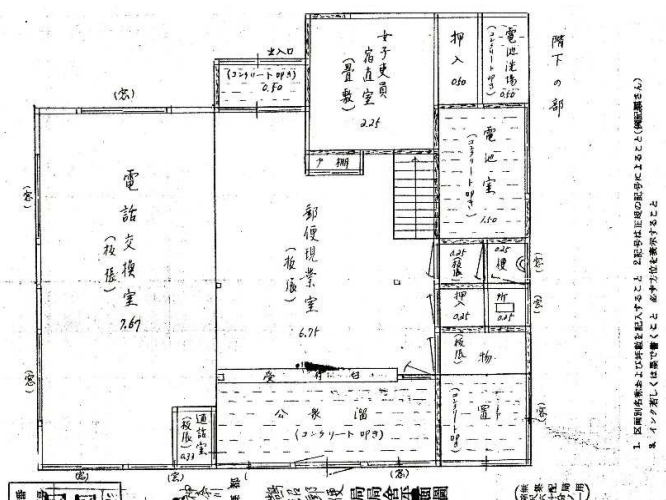


4代目郵便電話局

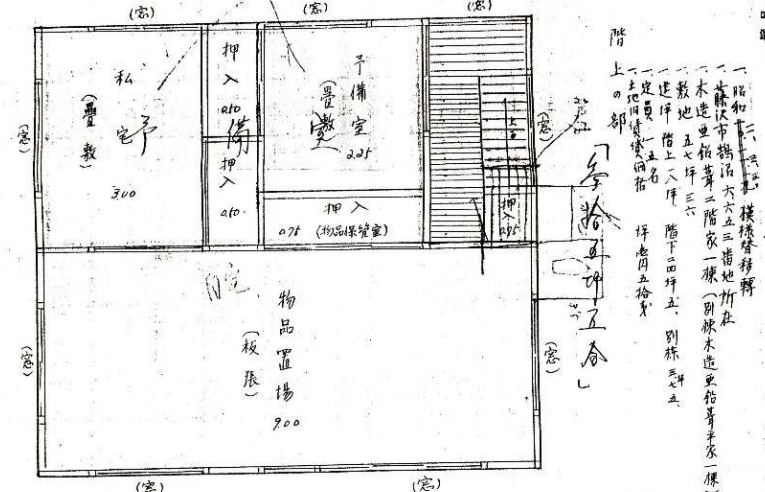
所は従来の集会所の近くで現浜野牛乳店を海側へ入った右側で、これによりに商店街に面した旧集会所が4代目郵便局、電話交換室となった。昭和11年3月開設。この建物の左半分が交換室で、写真を拡大してみると貸電話室の電話機が1台見える。

4代目郵便局の図面2枚を見ると、局舎は敷地57.36坪、建物は階下24.5坪、階上18坪の木造亜鉛鉄板葺2階建て。面白いのは、当時の電話の必需品である電池の洗場と電池室が見られることである。

4代目郵便局1階



4代目郵便局2階



大正十一年度

鴫沼局特設電話架設費明細報告

鴫沼局 四九 番納分

一金 四百六十五圓七十六錢

電話機設置場所ト局間ノ丁程ハ丁六ニ間外ニ特別負担ト間

總工事所要費額

| 種 目             | 金 額      |
|-----------------|----------|
| 工事用物品代 (電柱電線其他) | 三、二八四三〇〇 |
| 工事材料運搬費         | 二七四五〇〇   |
| 松丸其他            | 五三〇〇〇    |
| 備人料             | 三三七六〇〇   |
| 加入寄附金           | 五八五〇〇〇   |
| 竹梯子武挺           | 二〇五〇〇    |
| 器具修善費及損料        | 五〇〇〇     |
| 工夫並ニ備人手當費       | 四六〇〇〇    |
| 電池材料入紙貳個        | 三五〇〇     |
| 器具借入品運搬費        | 一四三〇〇    |
| 諸雜費             | 七〇八二〇    |
| 雜役人其他日當         | 六六六〇〇    |
| 各種印刷費           | 六五〇〇     |
| 測量費及製圖費         | 九〇〇〇     |
| 交換機受話器壹個        | 六五〇〇     |
| 工事後直シ (阿部別莊前)   | 七〇〇〇     |
| 電話機額修繕用通氣式個     | 一〇〇〇〇    |
| 計 金             | 四、六〇〇二六〇 |

内 譯 { 總額 金四千六百圓拾六錢也  
加入者十三名 總延丁八十二丁二十七間  
一間當リ 金九拾四錢二厘

右割合ニ依リ豫納金五百圓ニ對スル剩餘金還付高

金之四百六十五圓七十六錢也

算 出 方 法

一大體ニ於テ電話機設置場所ト局間ノ距離ニ應ジ算出シタルモ丁程八丁以上ノ加入者ニ對シテハ八丁ニ止メ其補助ハ丁程六丁以內加入者ノ特別負担トス

其丁程及費額 (三百八十八圓  
三百六十五圓五十錢

右之通り相違無之候也

大正十二年十一月二日

鴫沼局特設電話加入者總代



昭和 24 年、郵便・電話が分離され鵜沼郵便局となったが、昭和 39 年 8 月、鵜沼松が岡 1 丁目に郵便局が出来たため鵜沼海岸郵便局と改称された。

**5 代目・6 代目鵜沼海岸郵便局** — その後、半世紀を経て昭和 55 年 1 月に 5 代目鵜沼海岸郵便局として商店街の別の場所（鵜沼海岸 3 丁目）に移った。

さらに平成 29 年 1 月、6 代目鵜沼海岸郵便局が 5 代目の位置から 3 軒先に移り、ATM も 2 台に増やされ利用者の便を図っている。



5 代目 鵜沼海岸郵便局



6 代目 鵜沼海岸郵便局

| 局 所 (その 1)        |                     |                   |            | 整理番号       |              |       |            |
|-------------------|---------------------|-------------------|------------|------------|--------------|-------|------------|
| 年 月 日             | 局 名<br>(振り仮名を付けること) | 位 置               | 局 順<br>番 号 | 受 持<br>集配局 | 受 持<br>指 定 局 | そ の 他 | 備 考        |
| 明治 40 年 1 月 1 日   | 鵜沼郵便局               |                   |            |            |              |       |            |
| 大正 8 年 12 月 16 日  | "                   | 藤沢市鵜沼海岸 1 丁目 6660 |            |            |              |       | 移転         |
| 昭和 11 年 11 月 10 日 | "                   | 鵜沼 6650           |            | 藤沢         |              |       |            |
| 昭和 29 年 1 月 1 日   | "                   |                   | 神無 4 4     | 藤沢         |              |       | 02-104     |
| 昭和 39 年 8 月 1 日   | "                   | 藤沢市鵜沼海岸 2 丁目 7-4  |            |            |              |       | 住所表示変更     |
|                   | 鵜沼海岸郵便局             |                   |            |            |              |       | 局名改称       |
| 昭和 55 年 1 月 1 日   |                     | 藤沢市鵜沼海岸 3-1-12    |            |            |              |       | 移転(指上作業完了) |

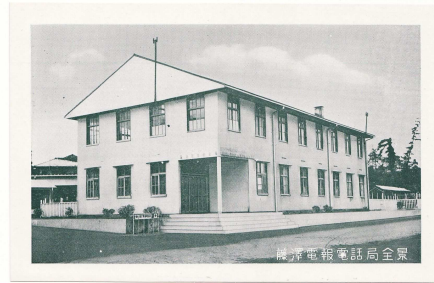
鵜沼郵便局の開  
設年月日、局名、  
位置などが記載  
されている

| 局 長              |           |     |                   | 整理            |  |
|------------------|-----------|-----|-------------------|---------------|--|
| 任命年月日            | 氏 名       | 性 別 | 生 年 月 日           | 住 所           |  |
| 明治 29 年 1 月 1 日  | 浅 堀 金 兵 衛 | 男   |                   |               |  |
| 昭和 29 年 2 月 2 日  | 廣 岡 助 五 郎 | "   |                   |               |  |
| 昭和 39 年 1 月 1 日  | 今 泉 頼 二   | "   |                   |               |  |
| 昭和 55 年 8 月 1 日  | 今 泉 倫 雄   | "   | 明治 24 年 6 月 25 日  | 藤沢市鵜沼 6660    |  |
| 昭和 59 年 7 月 17 日 | 大 矢 平 次   | "   | 大正 14 年 2 月 6 日   | 鎌倉市腰越 6-19-28 |  |
| 昭和 60 年 3 月 3 日  | 常 深 次 郎   | "   | 昭和 7 年 4 月 8 日    | 横須賀市追分町 1-97  |  |
| 平成 27 年 7 月 15 日 | 矢 崎 政 弘   | "   | 昭和 19 年 12 月 23 日 | 茅ヶ崎市矢畑 92-5   |  |

鵜沼郵便局歴代  
局長名と任命年  
月日が記載され  
ている

## 郵便局、電報電話局の分離

昭和 24 年、電気通信省設置に伴い電話業務は郵便局から離れ電報電話局の時代に入った。このため、鎌倉、藤沢、茅ヶ崎、平塚の 4 市が藤沢電気通信管理所の管下に入り、昭和 27 年 1 月藤沢局は磁石式から自動式に改式したが予算の関係で鶴沼、辻堂、片瀬は後回しになった。しかし翌年の昭和 28 年 10 月に「藤沢市 4 電話局合併期成会」が結成され、この事業費 2 億 4 千万円の内、藤沢市が電話債券 7,000 万円を引き受け、鶴沼なども昭和 29 年 4 月 1 日に自動化された。



自動式電話開通記念絵はがき(昭和 29 年 3 月)

この時、藤沢局の加入者数は 2,393 で、1 万を突破したのは自動化された 7 年後の昭和 36 年であった。昭和 40 年、藤沢 6 ダイヤル化、昭和 48 年電話 FAX サービス開始、昭和 50 年ポケベルサービス、昭和 60 年民営化となり、新電々公社(NTT)の時代に入った。加入者数は昭和 55 年、藤沢で 10 万、平成 2 年には 34 万となった。

電話料(度数料)の変遷は昭和 21 年 20 銭、昭和 23 年 2 円、昭和 26 年 5 円、昭和 28 年 7 円と急上昇した。昭和 20~30 年代に電話は目覚しく普及したが、電話普及の第一グループは東京・横浜の普通(官設)電話で、次いで湘南地方の葉山、鎌倉、大磯、宮ノ下、湯本が第二グループを形成した。千葉県、埼玉県、群馬県、茨城県にはまだ電話交換が全く無かった時代であり、この驚異的な開通時期の早さは別荘文化が大きな後押しとなり、もたらしたものである。

都会から鶴沼に移り住んだ人には電話が必要であり、一時的な仮住まいの人にとっては借電話、言付け電話、呼び出し電話の方法があった。商家だった我が家でも、近所の「イの 4 号」に住んでいた芥川龍之介への呼び出し電話、少し離れた所の岸田劉生宅へは祖母が言付け電話で走ったなどのエピソードを聞いている。

余談だが芥川龍之介が「イの 4 号」に住んだ時、隣が音楽や話し声で騒がしい

ので近くにある2階家に引っ越したという話がある。「イの4号」と旧集会所は背中合わせで隣り合っていたので、多分この集会所の騒ぎが原因だったのだろう。

学校は警察などと違って一般人用の特設電話の範疇だったので電話が引きにくく、鵜沼小学校に電話設備（番号 100 番）を祖父の有田金八が寄付した。これに対し丁寧な礼状が藤沢町長・金子角之助、学務委員・高松良夫、斉藤保、学校長・土方義造らより届き、我が家に残っている。

## 電話番号簿

鵜沼局電話番号簿の変遷

- ・大正9年 42名 番号順 縦書き
- ・大正14年 68名 番号順 縦書き
- ・昭和2年 75名 番号順 縦書き
- ・昭和3年 84名 番号順 縦書き
- ・昭和12年 204名 アイウエオ順 横書き



昭和2年の神奈川県下各地特設電話番号簿

ここでは昭和2年2月1日現在の特設電話番号簿を参考に掲載しておく。

| 鵜沼特設電話加入者名及番號 |                     |
|---------------|---------------------|
| 番号            | 加入者名                |
| 一             | 鵜沼郵便局 (公共通話用及電報託送局) |
| 二             | 佐藤てう (一般事務用)        |
| 三             | 松本徳治郎               |
| 四             | 鵜沼海濱醫院 福田良平         |
| 五             | 宮崎寛愛                |
| 六             | 鵜沼庵 中野一郎            |
| 七             | 石島興三郎               |
| 八             | 田中文藏                |
| 九             | 東家 長谷川欽一            |
| 一〇            | 青山藤郎                |
| 一一            | 田中銀之助               |
| 一二            | 齋藤百貨店 齋藤萬次良         |
| 一三            | 江澤金五郎               |
| 一四            | 藤堂別郎 藤堂高昭           |
| 一五            | 瀧山米太郎               |
| 一六            | 關根善太郎               |
| 一七            | 終古亭 千春恒次郎           |
| 一八            | 都河龍                 |
| 一九            | 川崎なか                |
| 二〇            | 廣岡助五郎               |
| 二一            | 益田信世                |
| 二二            | 松本源三郎 無人駐           |
| 二三            | 後藤武夫                |
| 二四            | 田中盛秀                |
| 二五            | 井上政良                |
| 二六            | 明月 有田金八             |
| 二七            | 永原伸雄                |
| 一             | 藤澤町鵜沼下藤ヶ谷六三六五ノ四五    |
| 二             | 鵜沼字下岡六八二八           |
| 三             | 同六六三二               |
| 四             | 同六七三五ノ五             |
| 五             | 同六六二九               |
| 六             | 同六六三二               |
| 七             | 同中蔵ヶ谷三〇ノ四           |
| 八             | 同六六四二               |
| 九             | 鵜沼字上綱五三一六           |
| 一〇            | 同五二一七               |
| 一一            | 鵜沼中岡六九九ノ二           |
| 一二            | 鵜沼字下綱五三五一           |
| 一三            | 同字下岡七三六五            |
| 一四            | 同字下綱五五八ノ一           |
| 一五            | 鵜沼字下岡七三九三           |
| 一六            | 同七三九三               |
| 一七            | 下岡六六四八              |
| 一八            | 同五三三二               |
| 一九            | 同六六五一               |
| 二〇            | 同六六四六               |
| 二一            | 同六六八七               |
| 二二            | 鵜沼字下岡六六七五           |
| 二三            | 同字下藤ヶ谷三〇五           |
| 二四            | 同字下岡七三六五            |
| 二五            | 同六六五三               |
| 二六            | 同六七一                |
| 二七            | 同六七一                |
| 一             | 和洋菓子店               |
| 二             | 會社                  |
| 三             | 海水浴旅館料理店            |
| 四             | 和洋酒類雜貨商             |
| 五             | 官吏                  |
| 六             | 齋藤洋食牛肉水販賣           |



|    |             |                |         |
|----|-------------|----------------|---------|
| 二八 | 長谷川タカ       | 同沼下岡六六四二       |         |
| 二九 | 菊本直次郎       | 同下藤ヶ谷七三九三      |         |
| 三〇 | 齋品泰輔        | 同下岡六六八一        | 書       |
| 三一 | 上原才一郎       | 同字中岡六九二〇       | 籍       |
| 三二 | 小林孫一        | 同下岡六八二八山口儒三方   |         |
| 三三 | 小田柿捨次郎      | 同下藤ヶ谷七三九三      |         |
| 三四 | 東家支店 長谷川欽一  | 同六六二九          | 煙草和洋酒類商 |
| 三五 | 川井清三郎       | 同中岡六六一二        | 銀       |
| 三六 | 三輪喜太郎       | 同六六六七          | 行       |
| 三七 | 渡部涉         | 鶴沼高根五〇三五       | 著       |
| 三八 | 吉田千藏        | 同六六六五三         | 述       |
| 三九 | 小島信彦        | 同六七〇八          | 業       |
| 四〇 | 湯河元臣        | 中岡六六三四         |         |
| 四一 | 伊東ぬい        | 同六六六三二         |         |
| 四二 | 小林フミ        | 鶴沼六二八九         |         |
| 四三 | 西脇晋         | 同六六六四二         |         |
| 四四 | 松村恒次        | 鶴沼下岡六三二七       | 米       |
| 四五 | 堤長逃         | 同下藤五五四八        | 穀       |
| 四六 | 服部盛         | 上藤ヶ谷六八〇三ノ四     | 會       |
| 四七 | 熊倉良助        | 鶴沼下岡五七四七沼田權次郎方 |         |
| 四八 | 三輪徳寛        | 鶴沼上藤ヶ谷六三ノ二     | 醫       |
| 四九 | 佐藤てう        | 鶴沼下岡六八〇三ノ一五    |         |
| 五〇 | 竹内治郎兵衛      | 同下藤四九九二        |         |
| 五一 | 木村齊雄        | 鶴沼下藤五〇五五       | 銅       |
| 五二 | 塚本長七郎       | 同六六七〇三         | 管       |
| 五三 | 田中耕太郎       | 同六六二九          |         |
| 五四 | 各務幸一郎       | 同上藤ヶ谷壹壹ノ二      | 會       |
| 五五 | 渡邊彌吉        | 同字藤ヶ谷七三二七ノ七    | 醫       |
| 五六 | 富士山         | 同下岡六七八七        |         |
| 五七 | 矢島榮助        | 同上藤ヶ谷七三六五ノ二〇   | 洋       |
| 五八 | 三枝七七        | 同中岡六五八〇ノ五      | 品       |
| 五九 | 高松内科醫院 高松貞夫 | 同六六七〇三ノ一七      | 醫       |

鵜沼ノ部 特設電話加入者名及び番号 p62

|    |       |           |   |   |   |   |   |   |
|----|-------|-----------|---|---|---|---|---|---|
| 六一 | 目貫禮三  | 同高根五〇三八   | 諸 | 機 | 械 | 製 | 造 | 業 |
| 六二 | 吉村鐵之助 | 同二五二四     |   |   |   |   |   |   |
| 六三 | 木下利吉  | 鶴沼下岡六六八五  |   |   |   |   |   |   |
| 六四 | 平澤政三  | 同六七一五ノ五   | 會 | 社 |   |   |   |   |
| 六五 | 玉井義助  | 同下藤ヶ谷七三四五 | 會 | 社 |   |   |   |   |
| 六六 | 淺揚兼吉  | 同下鰯五四三七   | 竹 | 木 |   |   |   |   |
| 六七 | 加藤德太郎 | 同中岡六三二ノ一  | 建 | 築 |   |   |   |   |
| 六八 | 片山とし  | 同下鰯五五七四   |   |   |   |   |   |   |
| 六九 | 松本直祐  | 同中岡六四二一   | 會 | 社 |   |   |   |   |
| 七〇 | 水野穂作  | 同下岡六六二九   | 會 | 社 |   |   |   |   |
| 七一 | 作田高太郎 | 同中東二九三七   | 辯 | 護 |   |   |   |   |
| 七二 | 伊東將治  | 同下岡六六四二   |   |   |   |   |   |   |
| 七三 | 一木與十郎 | 同中岡六六三三   |   |   |   |   |   |   |
| 七四 | 山下秀隆  | 同下岡六六七三   |   |   |   |   |   |   |
| 七五 | 玉生槌太郎 | 同下岡六六二八ノ五 |   |   |   |   |   |   |

鵜沼ノ部 特設電話加入者名及び番号 p63

今は電話帳といわれているが、初期の頃は電話番号簿といわれていた。この電話番号名簿は、そのまま紳士録でもあった。

その番号の1番は郵便局(電話局)で、どの土地でも変わりはない。次の2番は、その電話開設に最も貢献した人で昭和2年2月1日現在版の電話番号簿をみると、鵜沼局では岸田劉生にゆかりのある別荘を持っていた芳藤園の佐藤てう。

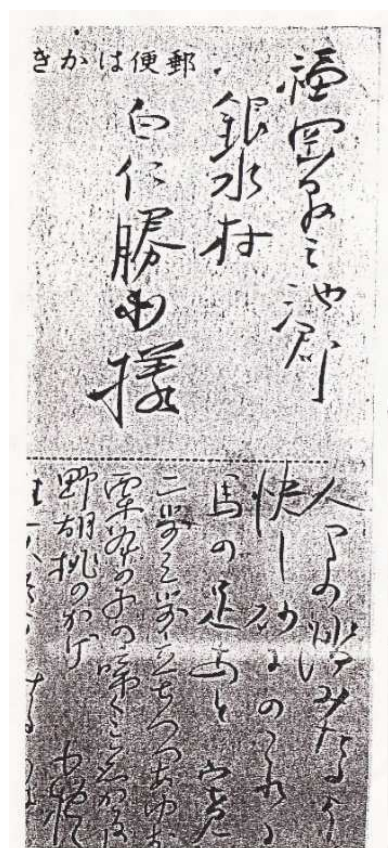
翌年の昭和3年版の電話番号簿を見ると14番は大正14年から藤堂高紹だったが、鵜沼海岸駐在所に変更。10番は、青山禄朗から鵜沼乗合自動車へ。当会員だった医師の富士山は

56 番、高松分院は 59 番、大正 14 年と昭和 2 年版に掲載の熊倉良助（47 番）は、熊倉通りをつくった人ではないだろうか。

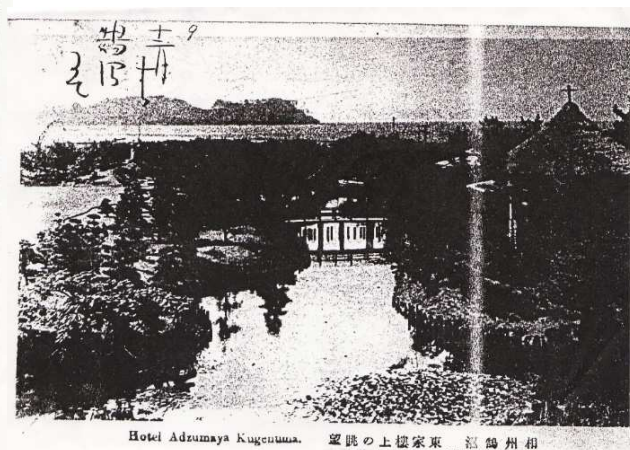
また昭和 12 年の番号簿には湘南学園（178 番）、杉本修（202 番）、広田弘毅（175 番）、鶴沼小学校（100 番）、八百利昇三有田屋（112 番）などが見られるが、誌面の関係上、省略する。

大正 9 年に与謝野鉄幹が鶴沼郵便局から出した東屋絵はがきと電話機の変遷を参考資料として掲載し、終わりとする。

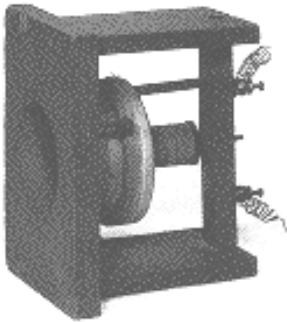
（ありた ひろかず）



与謝野鉄幹が大正 9 年 12 月、鶴沼郵便局から白仁氏に出した東屋の絵はがき



## 【電話機の歴史】



ベル電話機



国産第 1 号電話機



ガワーベル電話機  
明治 23 年 (1890)



2号共電式壁掛電話機  
明治 42 年 (1909)



2号自動式卓上電話機  
昭和 2 年 (1927)



3号自動式卓上電話機  
昭和 8 年 (1933)



4号自動式卓上電話機  
昭和 25 (1950) 年



600 形自動式卓上電話機  
昭和 37 (1962) 年



プッシュホン  
昭和 44 (1969) 年

< 「電話 100 年小史」 日本電信電話 広報部 >

# 越谷 達之助 と 忍 節子

岡田 哲明（会員）

鵜沼に住んだ二人の映画人を紹介する。

## 越谷 達之助（こしたに たつのすけ：俳優・作曲家）

歌が好きな方は石川啄木の「初恋」の歌をご存知とおもう。この歌を作曲したのが 越谷達之助（1909/2/5～1982/3/6）である。

砂山の砂に 砂に腹ばい 初恋の いたみを遠く 想いいずる日  
ソソミーミミ | ミファソーレー | ソソレーレレ | レミファミー という旋律を聞けば、「ああ、あの曲か」といわれる人も多いであろう。

この曲は歌曲集『啄木に寄せて歌える』所載。「三浦環先生に捧ぐ」と献題されている。初演は 1940 年、日比谷公会堂で名ソプラノ歌手三浦環によって歌われ、伴奏は作曲者自身がピアノを弾いた。

越谷は 1931 年、東京音楽学校（現：東京芸術大学）師範科を卒業し、和歌山師範学校の音楽教師になった。師範付属の小学校でも教鞭を取った。

その後、上京して作曲活動をしながらか松竹に入社、高倉彰（たかくら あきら）という芸名で映画俳優として 1939 年から 7 年間に 24 本の映画に出演しているが、主役を演じたことはない。もっとも有名な映画は 1945 年 10 月封切「そよかぜ」で、並木路子が歌う主題歌「リンゴの唄」（サトウハチロー作詞、万城目正作曲）は、「異国の丘」とともに 1946 年 1 月から始まった NHK 素人のど自慢の定番曲となった。

赤いリンゴに 唇寄せて 黙ってみている 青い空  
リンゴは何にも 云わないけれど リンゴの気持ちは よくわかる  
リンゴ可愛や 可愛やリンゴ

1946 年に俳優を止め、やがて世田谷区立新星中学（現：三宿中学）の教師を経て、青山学院の音楽教師となり、青山学院高等学校、青山学院大学、同短大で音楽を教えた。

映画俳優、作曲家、伴奏ピアニスト、音楽教育家、詩人、また朗読家として多岐にわたる活動をした人であった。

越谷が、鵜沼のどこに住んでいたかということ、東屋の跡、長谷川欽一郎の離れ



を借りていた。欽一令息で当会会員長谷川祐さんが「僕のうちの離れに住んでいた」と証言されている。時期は戦後、昭和 22 年頃からの 2~3 年、お母さんと二人で住んでいたという。よく長谷川家の母屋にあるピアノを弾きに来たそうである。作曲家にとって終戦直後にピアノが弾ける環境は貴重だった。越谷が長谷川家に借家したのは、家主の長谷川欽一の奥さん（忍節子）が女優時代に共演したこともあるからである。

二人は 1939 年 12 月封切の「暖流」前後篇で、越谷が橋爪博士、忍が女医の役で共演している。主演は佐分利信、監督は吉村公三郎、原作は岸田国士である。1939 年は、その 4 年まえに日活を追われた島津元が佐分利信と芸名を変えて松竹に移り黒木しのぶと所帯を持って鵜沼で暮っていた時期である。ちなみに松竹大船撮影所は 1939 年 1 月の開所である。

越谷達之助は 1982 年に 73 歳で死去したが、そのお墓は鵜沼の本真寺（尼寺）にある。彼はクリスチャンであったそうだが、どういうわけか浄土宗のお寺の墓地に埋葬されている。

### 忍 節子（しのぶ せつこ：女優）

映画女優 忍 節子（1914/7/22~2008/2/7）は、本名：長谷川君子（旧姓・中田）東京都下谷区竹町で生れ、忍ヶ岡高等女学校を中退して銀座松屋の電話交換手をしていてスカウトされ 1934 年松竹蒲田撮影所に入った。高杉早苗、久原良子、御影公子、小池政江、水島道代、黒田記代らとラッキーセブンの名で売り出す。

成瀬己喜男監督「限りなき舗道」で、いきなり主役デビュー。その後は市川右太衛門の相手役を勤めたのが主演級の活躍。1938 年に準幹部、1939 年舞台装置家の金須孝（きすたかし）と結婚した。1940 年幹部待遇となるが、1942 年良人を結核で失い、1945 年終戦を機に松竹を退社した。昭和 21（1946）年、2 年前に妻に先立たれた長谷川欽一と再婚した。1955 年家城巳代治監督の「姉妹」でカムバック、新東宝の五所平之助監督「たけくらべ」芸研プロ「柿の木のある家」1956 年東映の「竜巻三四郎」に助演したのを最後に映画界から引退した。1957 年から 1963 年まで 20 数本のテレビドラマに出演しているが、その後は専業主婦として家庭に入った。1985 年 85 歳の欽一を見とり 2008 年 94 歳で亡くなった。長谷川家は本真寺の檀家であり当然のことながら彼女は本真寺墓地の長谷川家の墓に葬られている。

（おかだ てつあき）

## お供から始まった江ノ島の釣り

—— 江ノ島の変遷もふくめて ——

内藤 喜嗣（会員）

### はじめに

前回のサーフィンの歩みの冒頭で述べたように、父 内藤長一は大の釣り好きだった。その切っ掛けは浜からの投げ釣りでキスが良く釣れたこともあるが、町の有田商店の若旦那（有田良夫氏・有田会長のお父上）に誘われて引地川から舟を出してソーダガツオ釣りをして大漁だったことが大きかったようだ。以来、有田良夫氏とは鵜沼海岸での釣り仲間だった

と聞いている。**写真1）2）** 当時、東仲通り（天金通り）の普段は養鶏をしていた小林、庭仕事の手伝いをしていた葉山などは地引網の網元『高網』の組員の漁師で、引地川河口に小型の漁船を繋留して、春はキス釣り、夏は沖に出てソーダガツオ、サバ釣りなどで別荘族の客を取っていた。

鵜沼での船釣りで父のお供をした時は、秋口だったと思う。前の晩に久松公爵邸の池に牛の脛骨を入れた大きな鉄の網籠を沈めて仕掛け、藻海老を捕り、これを餌にした。引地川の河口の沖に舟を舫い（もやい 錨を下ろして留まること）小エビをコマセ（撒き餌）にして待っているとセイゴからなりたての小ぶりの鱸（スズキ・出世魚）が釣れた。



1) 1926(大正 15)年 鵜沼海岸でキスの投げ釣り



1955(昭和 30)年頃の秋、西浦のポイントでクロダイを狙う内藤長一

ソーダガツオ釣りの時は夏の暑い日で、江ノ島の西浦でシラス曳船から生シラス、大きな生簀籠 **3)** に飼われていた鯉漁の餌のシコ鰯を分けて貰い餌にした。遥か沖合いまで船を漕ぎ出し舟を舫い、シラスと小ぶりのシコをコマセに流し、魚群を待ったが一向に魚は来ずに餌もコマセもなくなり、おけら（何も釣れない）に終わった。

＜父の手記＞——ソーダガツオのナムラ（魚群）を待って、高価な白糸魚（シラス）を撒き込んで幾時間、海は良し、風向きはよし、いま来るかのち来るかと恋人を待つ思いで竿先をにらんでも、ついに待ち人來たらず、あきらめて引き上げる間際になって食いが立ち始める。口惜しや餌さえ続けば四斗樽ものだという経験は、しばしば釣り師の味わうところであろう。——

戦後は、発動機船でナムラを追ってトローリングで釣るが、当時のはのんびりとしたものだった。

### 江ノ島の島周り

近代になるまで江ノ島の島口（入口）はカネの鳥居（青銅鳥居）の前だった。**4)** 江ノ島は岩山が寄り合う地形で、そこを縫うように坂道が通り、道に沿って東町、西町、山（山町）の大きく三地区の集落に分かれていた。

鳥居から東海岸に沿って、島の東側の州崎・聖天島（シーデンジマ・トビッチョ）・岩磯に砂が寄せたオカイソに続く東浦の磯に行く道は「東の通り」と云われた。中ほどにあったドブ川の石橋を境に鳥居までの西側の「北」、東南の磯沿いの「南」と云われた二つの東町の集落があり、主に漁業を営む漁師（漁師）の町だった。この北の東町の「東の通り」の海岸際の岸壁には数軒の漁師小屋があり、その中



2) 1915(大正期)年の引地川河口風景



2) 1933(昭和 8)年頃の引地川河口



2) 1933(昭和 8)年 鵠沼橋際



3) 1935(昭和 10)年代 片瀬西浦でカツオ漁用の生餌のシコ鰯を入れる大きな籠の生簀



4) 1875(明治 8)年頃の江ノ島の入口  
カネの鳥居(青銅の鳥居)前



4) 1890(明治 23)年に須田町埋め立てが行な  
われ川口村町営の橋が手前から架けられた



5) 1877(明治 10)年 7 月 17 日より 8 月 29 日ま  
でモース博士は江ノ島を訪れ、腕足類の研究  
のため漁師小屋を借りて日本で最初の臨海実  
験所を開き研究をした



6) 1877(明治 10)年頃 片瀬川河口からの写  
真絵葉書。モースの臨海実験所に使用された  
建物(↑)と思われる

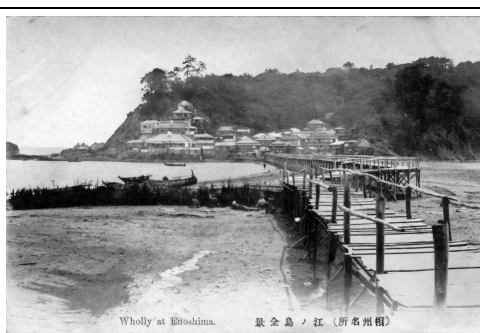
の一番鳥居寄りの小屋を米国の生物学者、エドワード・シルベスタ・モース (Edward Sylvester Morse) 博士が借り、日本で最初といわれる「臨海実験所」を開設した。モース博士は 1877(明治 10)年 7 月 17 日～8 月 29 日来島滞在し、腕足類(二枚貝の様な海洋動物でシャミセンガイもそのひとつ)の捕獲・研究をした。5) 6)

東町の海岸は 1890(明治 23)年に片瀬川河口の島の西浦に堆積した砂の浚渫で、島の入口の北東の地が州崎・聖天島まで埋め立てられ、東町に行く東の通りの海の前に須田町が出来、東町との間にナカミチが出来た。そして、以前は粗末な短い仮橋があったようだが、1891(明治 24)年、初めて片瀬の浜から江ノ島に川口村営の木橋が架橋され、江ノ島の栈橋と呼ばれるようになった。7) 8)

橋の長さは 320 間(約 578m)だったが、震災後の 1926(大正 15)年に 380 間(約 684m)になり、幅も 1 間(約 1.8m)になった。橋銭は島の入口の左手に小屋があり当初は片道一人 1 銭 5 厘だったが、1922(大正 11)年に村営から県営に移ってからは、洲鼻通りの掛茶屋で 2 銭の往復切符を売り 1935(昭和 10)年まで続き、その後廃止となった。



**7)** 1884(明治 17)年 研友社の尾崎紅葉、石橋思案、巖谷小波、江見水蔭などが江ノ島を度々訪れた。その頃の江ノ島  
高橋由一画 (江ノ島 金刀比羅宮博物館)



**8)** 1890(明治 23)年、島の北側は西浦からの土砂で埋め立てられ、須田町が誕生した。埋め立て時の状況



**8)** 1891 (明治 24)年、川口村の初めての棧橋が架けられた。渡り始めの絵葉書



**8)** 1891(明治 24)年、川口村の初めての棧橋が架けられた。片瀬西浜からの眺め

## 江ノ島の三集落

更に、1921(大正 10)年に鳥居の西側を中心に埋め立てが成された。鳥居から辺津宮までの大坂の商店街の「宿(シュク)の道」の東側沿いから西が西町で宿町とも云われた。辺津宮から段々道を登り中津宮、ヤマフタツを抜け奥津宮を通り岩屋までのウワミチ(岩屋通り)沿いが山(山町)の集落で、これに東町を加えたのが江ノ島の三集落だった。**9) 10) 11)**

西町、山は来島者相手の宿、飲食、みやげ物店を営む人々が住み着いた集落だった。西町の入口の鳥居の右(西側)をオッコシバと云い、昔、橋のない時代に潮の満ち時に、島に渡る人を背負う負越師の集まる負越場があった。この脇を西に入るとシモジョと云う小高い山があり、脇の小路を抜けるとコバマ(小浜)の磯に出る、ここが西町の漁村である。

路の南、西浦に面し大崎稻荷・地藏様・薬師様・ミョウホ様が祭られる小高いテンダヤマ(天台山)がある。西浦の磯はかつてフナアゲジョといわれ、片瀬、藤



江ノ島の島周り  
1926(大正末)頃



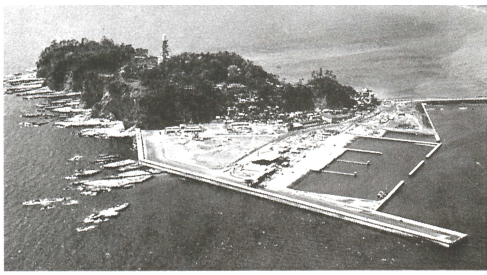
An aerial photograph of a small, densely forested island. A small settlement with several buildings is visible on the lower right side of the island. A pier or breakwater extends from the shore into the water, with several small boats or structures at its end. The island is surrounded by water, and the background shows a hazy horizon.

沢方面の荷の千石船と伝馬船との荷揚げ場所（港）となっていた。ウワミチはオンナミチ・ムネッテ・ゴケコーサカと坂が多くしんどいので、参道を上がった。かつて三重の塔があったサンジントウの石の鳥居を潜り右に入っていく西浦沿いのシタミチが山へ行く近道で、ヤマフタツの西でウワミチと合い奥津宮、岩屋に行く平坦な荷運びの道として開かれた。

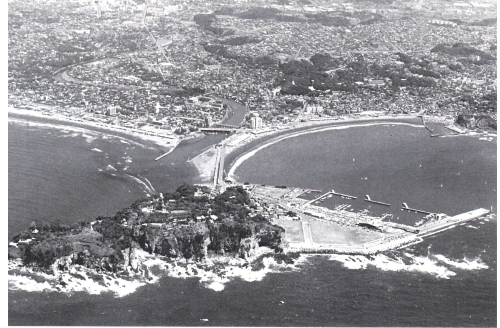
22



## 江ノ島を大きく変えた湘南港の開設



1964(昭和 39)年 湘南港完成時の空撮



1975(昭和 50)年の江ノ島空撮  
(小田急電鉄提供)



1996(平成 8)年2月の江ノ島撮影



2006(平成 18)年 3 月の江ノ島撮影

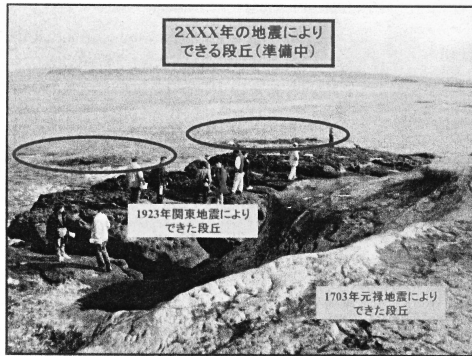
1964(昭和 39)年、江ノ島の東岸を埋め立てて湘南港が完成。湘南港 - 熱海 - 伊東を結ぶ水中翼船が定期運航する。1964 年東京オリンピックのセーリング競技会場となり、江ノ島は大きな変貌を遂げた  
3 年後の 2020 東京オリンピックのセーリング競技会場として再度、選ばれている

## 関東大震災による変化

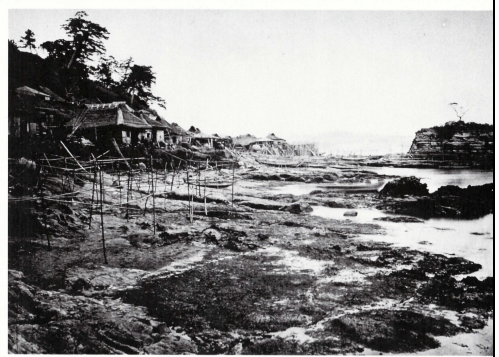
1917(大正 6)年の時化と大正 12 年の関東大震災で棧橋は流され、護岸までも削られ、聖天島の先の船揚場、オカISOが大きな被害を受けた。16)

一方では、この地震で地域全体の 90cm 余の隆起で、南浦の岩場には波食台地(段丘)が水面に現れ、広い平坦な岩場海浜が出現した。12) 14) 15) 20) 21)

神奈川県は早速、棧橋の一間幅の拡幅での復興を果たし、鳥居の西のシモジョから州崎、聖天島 13) までの埋め立てと護岸、オカISOを囲む海洋護岸のコンクリートでの建設に取り掛かり、1926(大正 15)年に竣工した。17) 18) 併せて江ノ島水族館を開設、復興を記念して聖天島周辺の埋立地で大日本海洋博覧会が 6 月 28 日から開催された。19)



12) 過去の地震による隆起で出来た波食台地(段丘)



13) 1877(明治 10)年頃に南側から撮影したオカイソ・聖天島



14) 1947(昭和 22)年、聖天島からの江ノ島東浦漁港、オカイソ。左奥に砲台跡が見える



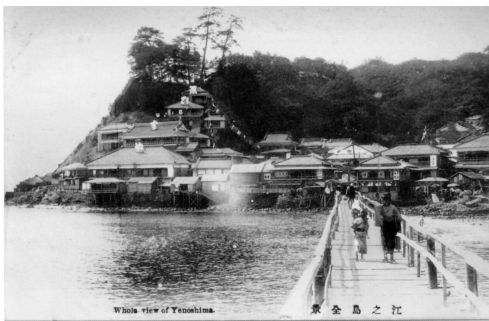
15) 1932(昭和7)年の稚児の淵の磯段丘



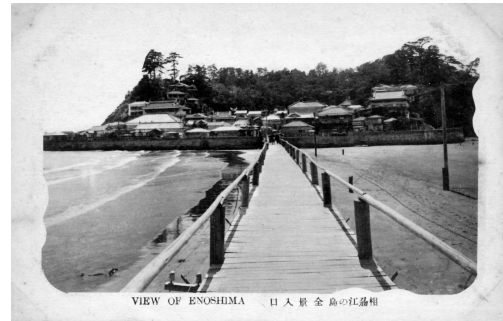
16) 1923(大正 12)年9月1日の関東大震災で棧橋は破壊された。日光から訪れていた観光客約 50 人が津波に攫われ、行方不明となり戻らなかった



17) 関東大震災で流失した棧橋は、翌大正 13 年には仮設復旧したが、東北の護岸が一部倒壊、削り取られた



18) 1924 (大正 13)年 仮橋復興



18) コンクリートによる護岸で復旧した江ノ島の北東岸と棧橋



19) 大日本海洋博覧会。左が第一会場、右が第二会場の江ノ島水族館入口。1926(大正 15)年 6 月 28 日から開催された



19) 大日本海洋博覧会。第一会場入口

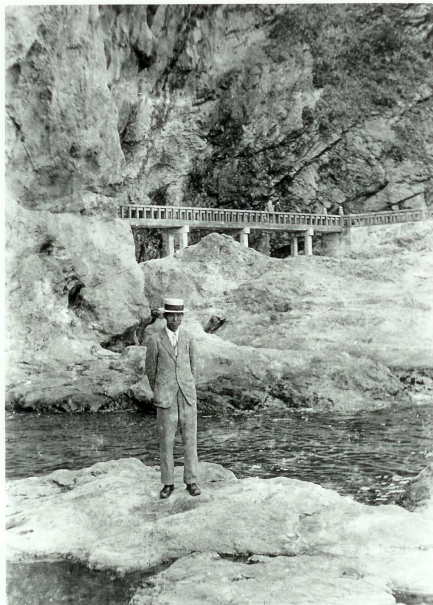


19) 大日本海洋博覧会。第一会場内部風景



19) 大日本海洋博覧会。第二会場の江ノ島水族館入口





20) 1932(昭和7)年の第二洞窟前



21) 1947(昭和 22)年岩屋から見た磯段丘

## 江ノ島の漁業

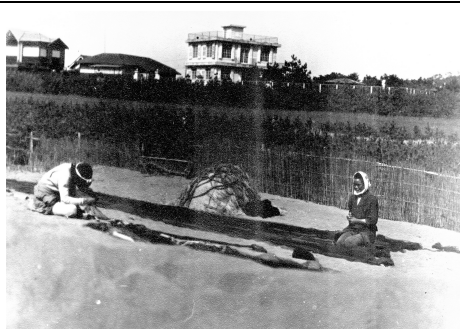
漁村は東浦と西浦にあった。東は東町の先の小高い二つの岩山の聖天島から南のオカイソに舟揚場、網干し場が広がっていた。西には小浜、岩本楼の裏の西浦を拠点にした遠出の大型の船の繫留、船揚場が造られていた。

片瀬の大所、山本家の百太郎翁は回顧談の中で「明治 30 年代の江ノ島の岩屋辺では、釣竿で鰯が釣れたものであった。それ程当時の片瀬海岸（江ノ島周辺）はよい魚場であったのである。」と語り、1897(明治 30)年には片瀬・江ノ島周辺海域での定置網（大謀網）の漁業権を取得していた。船 5 艘を用意して春秋二季の漁業に宮古から熟達した漁夫を 40 人ほど雇い入れ、片瀬川河口に建てた仮小屋に住まわせ、網の仕立て、設置からすべてを任せる網元として漁をはじめた。

漁獲はまずまずで、大物は鮪・鰯・鱈・鯉・ソーダ鯉・鯛・鰺・鯖・カマス・鰯などが上がり漁業権免許の更新は続けられた。しかし関東大震災での千回にも及ぶ海底の余震と、その後の島の 90cm の隆起により片瀬・江ノ島一带には魚が寄りつかなくなっていた。そしてひとつの網元に牽引されていた片瀬・江ノ島一带の漁業は、戦後のマッカーサー指令による漁業権解放で様変わりすることになる。

## いろいろな網漁

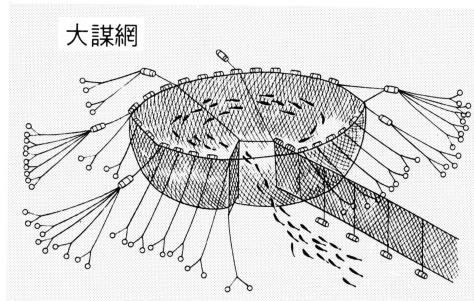
1951(昭和 26)年からチョコアミ(小ぶりの定置網)が 5ヶ所(五ヶ統)で始まり、



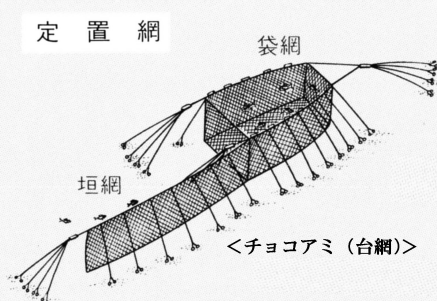
22) 片瀬川河口西岸で大謀網の支度をする漁師



22) 片瀬川河口西岸での大謀網の支度



23) 1897(明治 30)年 山本百太郎が漁業権を取得して江ノ島沖に設置していた「大謀網」の参考図



23) 1951(昭和 26)年 漁業権解放命令で小規模な定位置網「チョコアミ」が5ヶ所(五統)許可された

漁業組合で2統、遊覧船組合で1統、個人で2統(ジンエ・ウオダイ)が各々3艘程の船で毎朝の網閉め、漁獲を行っていた。22) 23)

現在は江ノ島片瀬漁業協同組合の1統が、型のクレーンの載ったダイフネ1艘と他の1、2艘で毎朝の網閉め、漁獲を行なっている。

戦前は、デュポン社のナイロンが無く、他の網もすべて麻と綿の渋糸の網だったので網は蒸れで破れ易く、アン針での補修はフナカタ(ノッコ・乗組員)の日常の仕事だった。島の網漁にはこのほかに「海老網」「真網」「巻網」があるが、島の周りには磯があり、地引網は片瀬の西浜にしかなかった。

海老網(メ網とも云う)は南の磯周りに夕方仕掛ける(磯建の定置)刺し網という細い渋糸の荒めの網で、アパ(浮)を85枚、そして下網の二十尋(一尋は両手を広げた長さ約1m60cm)にヤ(重り)をつける。海老の殻に絡み身動きができずにいるところを朝、引き揚げて獲る。イセエビは6月から8月が繁殖期でこの間は禁漁、また15匁(約56g)以下は獲らない決まりで、網からはずし放してやる。

江ノ島の真網(マ網)は本来のものと違い、漁師は片瀬の東浜と西浜の砂建の一枚の刺し網で車エビ・渡りカニ・ヒラメ・コチ・キス・イシモチなどを夜掛け、



朝開けで獲っていた。本来の眞網は2艘の船でナムラ（魚の群）を巻いて漁獲する。鰯、ワカナゴ、ソーダガツオ、鰺、鯖などの上もの獲りと、下もののカレイ、ヒラメ、ホウボウ、コチ、イシモチ、渡りカニを狙う底引漁があった。

巻網は1艘の船でシラス、シコ鰯曳きが主で、大きな樽浮き（ガラス球）を投げ入れ、浮に続く網を投げ入れながら群れを巻き、浮の位置に戻りイチアケ（網の最初）とシリアミ（網の終わり）を同時に巻き上げ（引き揚げ）ていき、中間につけたオオタ（袋）に追い込んで漁獲をする。シラスは浜で釜揚げにするか、海苔のように簾の上に枠型で干し、畳鰯をつくった。生きのいいシコ鰯は大籠の生簀に移し、沖のカツオー一本釣り漁に使い、他は煮干にしていた。

小型の船は船頭一人の一丁船だったが、網漁や遠出の船は五丁船・七丁船などもあった。1915（大正4）年、漁船に発動機が使われはじめた。小型の焼玉エンジンの威力は大変なもので、江ノ島でもポンポン船が増えた。そして戦後は、ディーゼルエンジン、ガソリンエンジンの船外機が盛んになった。

## 磯の漁

磯で囲まれた江ノ島なので網以外の漁がある。ミヅキ漁はボウチョウ、シタミ、フシズキともいい、船から箱メガネ（箱・樽の底にガラスが張ってある）を口にくわえ、片手でカイを持ち残りの手でフシ（モリ的一种で和竹に樫棒を繋ぎ鋼の先が付く。突き先は狙う獲物で一本から何本かに分かれており、形状も違う）を持ってサザエ・アワビ・トコブシ・ヒラメ・石ダイ・タコ・ナマコなどを獲る漁。このミヅキ漁をしていた人は江ノ島に多かった。

ムグリ漁、潜りのことをムグリという。誰でも漁師ならば潜れる。昔は東町の漁師はほとんどみんなムグリだった。東町の子は十二・三才になるとムグリを始めるが深さは平均、六尋。本当に潜れるようになるのは十六、七からで目への水压を護るため水中メガネを掛け、フルギという桐でできた丸い浮桶につかまり、心臓を楽にしてから潜る。このフルギにはスカリ（ツカリ 網の袋）がついていて、その中に獲れた物を入れる。また、潜る際につかまって行く重りが先に付いた十二～五尋の綱が付いていた。ムグリ師の中には桐の丸太を重りの操りに使っていた。さらに海深く潜れるようになると、フナムグリになった。二人で船に乗って行き、一人が潜り、一人は船で待っている。潜る人は、フンドンと言うハカリの銅を集めた重り（二十貫目＜75kg＞くらい）につかまって潜り、アワビのいる所で離して獲る。離れた重りのフンドンは、船にいる一人が船に揚げておいてくれる。いいかげん潜ると船の人が船の板を叩き、上がりの合図を知らせる。

これがムグリの漁だが、ムグリにはリーダーはおらず、自分の意思で体調にあわせ出漁した。昔は5月から10月の解禁期間中にムグリをする人が七、八十人いたそうである。

昔は、埋め立て前の聖天島（トビッチョ）と沖合いの栄螺島（サザエ島）ではサザエ・アワビ・トコブシがたくさん獲れたとのことである。

磯の漁のもう一つは海藻の採取である。海藻の口開け（解禁）は物によって異なるが、組合が潮時を見て決める。冬から春にかけて獲れるものが多く、寒いので脚絆を履き、競って獲りに行く。そして海藻は漁師の家の人しか獲ることが出来なかった。

ハンバ（ウミウチワ）は12月から2月にかけてとれる。これは波食台の際に付いているので、手でむしって獲った。茹でてから干す。

ノリの口あけは1月半ばで、潮時によりあけるが、大潮の干潮時が一番良い。ノリには色々種類があるが、いずれも胸までの足ながを履きブリキで出来ているノリカキという道具で引っかいて獲る。獲ったものを長方形の型に入れ、日に干すのは女の人の仕事である。ノリの種類には岩ノリ、青ノリ、ハバノリ、ボンボロケ（ナノリ、ハラとも）があり、獲ってからはこまかく叩いて、ヨナゲル（ごみや岩などを取り除く）。箱型の型にはめて一、二日干して製品にする。

ワカメは3月頃、潮時をみて口開けをする。東浦の山二つの辺りに集まり、組合の旗が降りると一斉に船上から竿の先に設えた鎌刃で切りはじめる。東町では獲れたワカメをすぐに聖天島近くの浜に作った大きなカマでさっと茹で、張り渡した綱に掛け干し保存した。埋め立て前の州崎の周辺は、良いワカメ場だったようだ。

ヒジキも3月頃が口開けで、手または包丁で獲る。加工は普通茹でて干すが、かさかさになるまで何度も広げては干す。

トコロテングサは4月頃に口開けされる。獲れた物は、真水で濯ぎ砂の上に広げて、白くなるまで毎日洗っては干し、洗っては干す。干しあがったものは、茹でて袋に入れてしぼる。しぼって出たつゆが固まってトコロテンになる。

そのほかにコンブ系のアラメ、ガジメ、チョセンボーがあるが少量だった。

## 釣り漁

ここからは江ノ島での釣りの話になる。前述のように西浦の漁師は早くから大型の発動機船を持った船主がノッコ（乗組員）を集め、仕立てて遠出のカツオ・マグロ・ブリなどの一本釣りの漁を盛んに行なっていた。

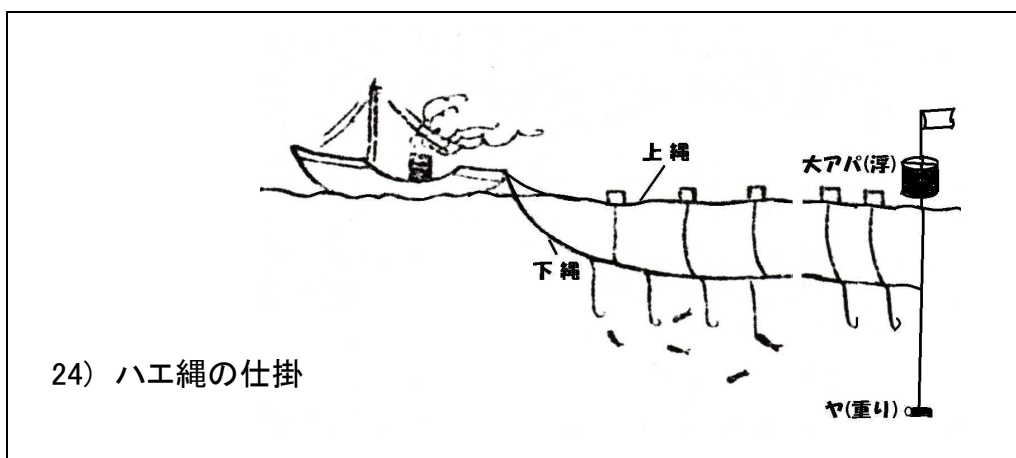
東も西に倣って何艘かの船を仕立てていた。西町の漁師は魚を追って大島、三宅島へも行ったそうだが、東町の船は殆どが沿岸、遠くても大磯、小田原方面まで、日帰りで帰ってきていた。

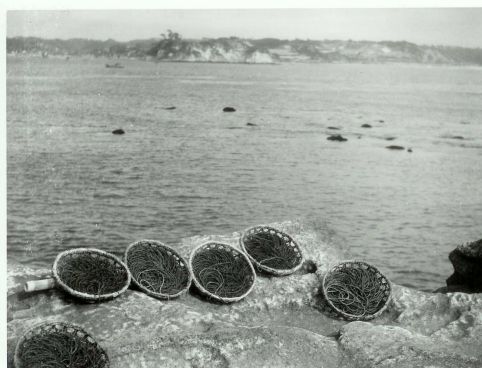
◇カツオの一本釣りー3月の終わり(4月に近い頃)になると相模湾にサンガツオがやってくるのでカツオの一本釣りが始まり、7月の中旬がピークになる。そして9月から11月にソーダガツオが獲れる。この漁は西浦の生簀から餌のシラス・シコの積み込みから始まる。現在の様な魚群探知機がない当時は、舳先の物見のトリヤマの発見から始まる。海鳥は大きい魚の餌となるシコ鰯の群れ(ナブラ)が追われて逃げ惑い水面にでてくるのを襲うため上空で舞う、これをトリヤマという。水面にいる船からはナブナは見えないがトリヤマが教えてくれる。

船はトリヤマめがけて突進し鰯のいる場所に行き、そこに持ってきたシラス・シコを撒く。すると、その群れが止まる。鰯はカツオなど大きな魚に追い詰められると、怖いので海の上に出てくる。カツオも出てくるので、竹の一本竿の鉤先にコンペントウというギジエ(ダマシエという)をつけて投げ込む。カツオはシラスと間違えて喰らいつくので、タイミング良く釣鉤に掛け引き上げて獲る。カツオは船に揚げると直ぐに死ぬので、氷の貴重な時代は早朝に漁に出て、市場に間に合うように昼過ぎには帰港した。

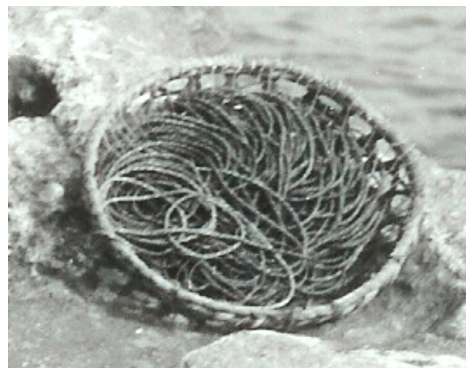
これがカツオの初期の一本釣りである。魚群探知機の発達した現在は、直接カツオの群れを探知して、群れの上に行き海水を舷側に放水して鰯が群れている様に見せ掛け、カツオを海面に浮かせて釣る。

◇ブリ漁ーブリも定位置網が始まるまではカツオと同じように一本釣りで獲った。1～2月の寒い時期にエボシ岩の沖の方でナムラを見付け、釣る。ブリは灯りをつけての夜釣りでも釣れたそうである。





**25)** 1947(昭和 22)年 江ノ島漁港あなご  
漁延縄



**25)** あなご漁延縄

◇マグロ漁—昔は相模湾にも 10 月になるとマグロが来たが、泳ぎが速くなかなか当たらない。近年は巧妙なハエ縄漁が生み出されていて、昼間マグロを見た場所に夕方、スルメイカを釣鉤につけ、仕掛け、翌朝早くに引き揚げる。マグロがだめでもシイラなど他の魚が掛かっている。

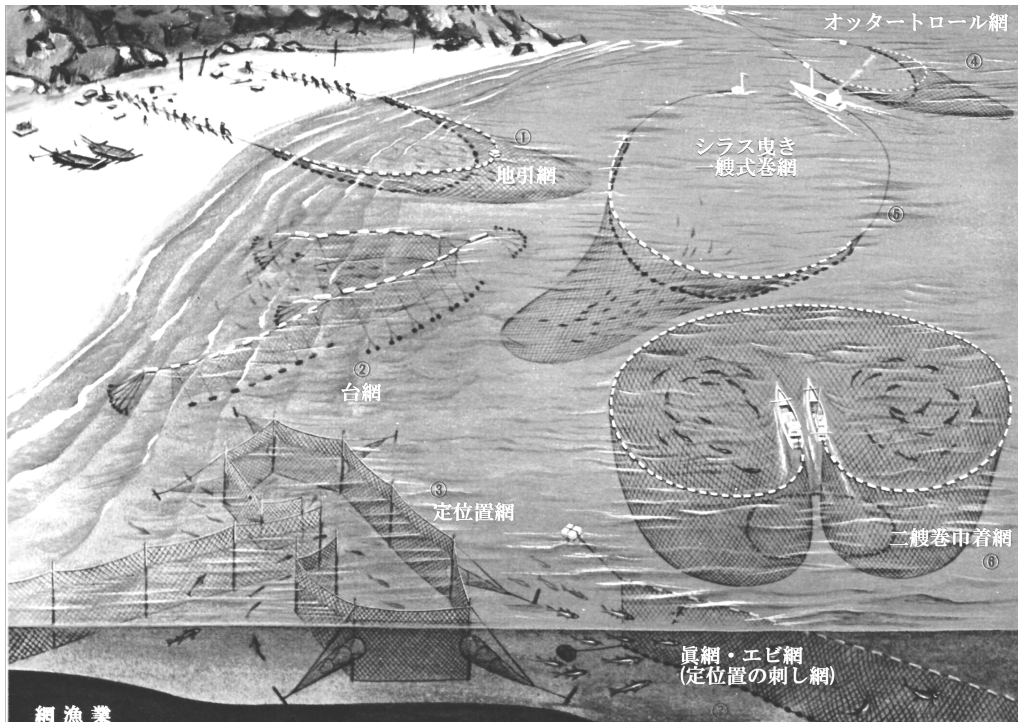
◇その他のハエ縄漁—ハエナワはナワフネ、ノベナワともいい、仕掛けは二本の麻の糸を使う。まず上の糸の先にアパ(浮き樽またはガラス玉)を付け、下げ糸(狙う魚で長さが違う)を付け、その下に下糸を結ぶ。結び目に噛み潰しの鉛(重り)を付け、下糸の端に石(重り)を結び仕掛けの端が出来上がる。そして上糸にはアパ(板浮)を三尋間隔に付けてゆき、その下に下糸の支えをたらし、下糸を結ぶ。下糸には一尋ないし二尋間隔でより戻しを付けた一尋のハリスを繋ぎ、途中で噛み潰しの鉛(重り)を付け、釣鉤を付ける。

ここまでの支度で、餌のシコ鰯などを釣鉤に掛け、船からハエナワを流しながらゆっくりと進み仕掛ける。ハエナワはマグロやブリのほか、タイ、サバ、カマス、などを釣るときにも使う。獲物によって一時で揚げるもの、尻に旗つきの大アパ(浮樽、ガラス玉)を付けて一晩置き、朝揚げのものなどがある。**24)**

変わった縄にはアナゴ縄(籠)がある。**25)** アナゴは昼間砂に潜り、夜に砂浜の底で活動するので夕方に海底に縄を仕掛ける。この縄は、浮は要らず噛み潰しの鉛を付けたびし糸に一尋に二本の短めのハリスの釣鉤をつけ、エサに短冊に切ったイカを付け落として行く。尻に大アパ(浮樽)を付け、竿を立てて翌朝に引き上げる。

この縄は釣鉤が多いのでデカタ(出漁)前の支度の能率を良くするために、直径二尺ほどの平らの竹籠の外周の淵に釣鉤を順に掛け、縄も籠の中央に置いてゆき、一周終わると二番籠に移り、都合、五籠ほどが一縄になる。そして釣鉤を順に籠

## 26) いろいろな網漁



からはずしながら餌のイカを付けてゆき、船のドウノマに積み込みデカタをする。漁場は東浜の沖、七里ガ浜沖の磯の根の手前までの海域である。

ここまでは漁師の漁に係わることを述べたが、これからは父のお供をして知った素人太公望の楽しみとする釣りについて、まとめてみた。

### 日本初の百貨店釣具売り場

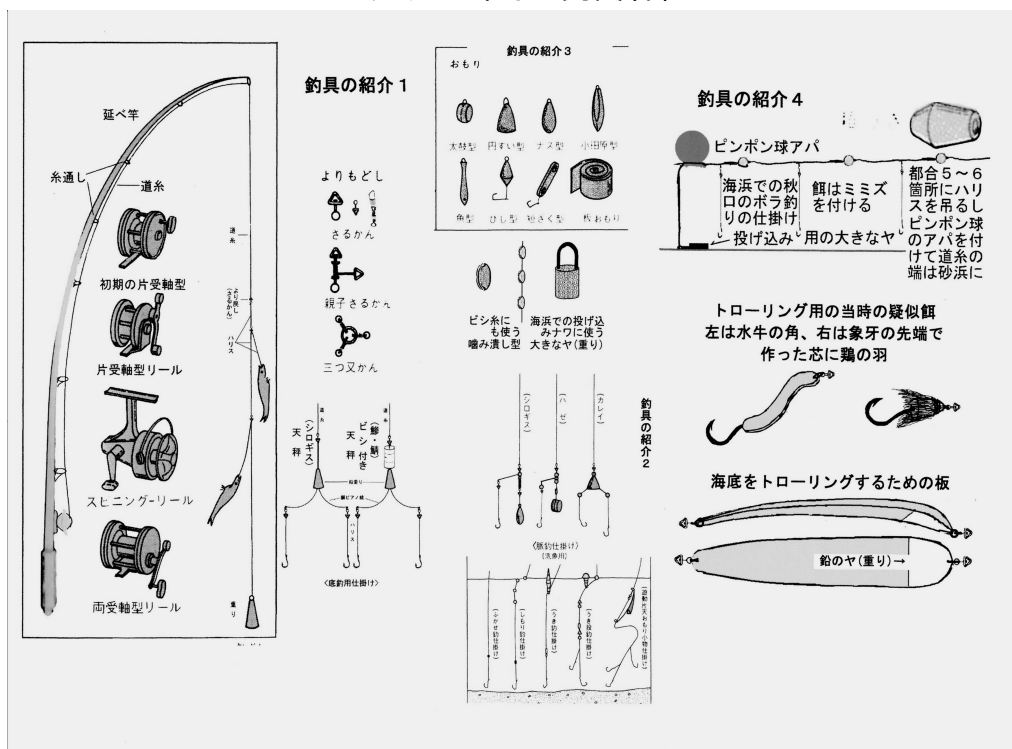
江ノ島の周りでは岩場、浜での陸釣り(おかづり、磯釣り、江ノ島では“おかっぱり”といった)と船に乗っての船釣りとがあり、釣竿を使う竿釣りと直接糸を持って釣る手繰り釣りがある。そして狙う魚の漁獲を上げるには、先達があみだした仕掛けを使うのが一番。そんな訳で父は色々の仕掛けを揃えていた。

東武鉄道が隅田川の吾妻橋の西詰めに終点の浅草駅のターミナルビルを建てた時に、銀座の松屋がテナントとして支店を出店、その責任者として父が赴いた。地域のリサーチをしている中に、この地域は知られざる漁業と釣りの盛んな土地であることを知り、建議をして日本では百貨店として初めての釣具売り場を開設した。そして浅草の釣具店の主人と懇意になり、釣りの極意を得た。

それが、江ノ島通いの始まりだった。島にない仕掛けを持ち込んで試し、成果が上がると悦に入っていた。そして改良、開発を手掛けた。



## 27) 延べ竿など釣具各種



前述のようにナイロンがない時代、ハリス(鉤素・ドウゴ)はテグス(天蚕糸＝中国原産のテグスサン<天蚕糸蚕>の成熟した変態直前の幼虫から粘液を抽出、ただちに希酢酸液に浸して出来上がる強靱な透明な繊維)を用いていた。

ミチイト(道糸、竿先、リールから仕掛けまでの釣り糸)には麻、木綿の渋糸(赤渋に浸し、強度、塩害防止を施した糸)が使われていた。しかし、これは水を含むと重くなり、強度劣化があった。

父は繋がりがあった帝国人絹に、当時開発が始まったパルプから繊維化したレーヨン原糸(フィラメント)を強撚糸に仕立てたミチイトの試作を依頼し、完成品を浅草の釣具店、江ノ島の漁師に持ち込んだ。漁師が使用した結果は良好で、売り場の目玉商品になった。

釣竿は当時ガラス繊維、カーボン繊維を基にした軽くて強靱な素晴らしい竿などは無い時代で、店に並んでいる竿は、選ばれた竹から和竿師が丹精かけて仕上げた高価なものばかりであった。その中の何本かが我家に飾られていたが、江ノ島で使うためでなく江ノ島用の延べ竿を造るための比較用のものだった。

鵜沼銀座通りの中ほどに矢島釣具・餌店があり、父が勤め帰りに前を通ると主人から「良い竹が入った」と声が掛かり、二間半ほどの延べ竿を担いで帰ってきた。

次の休日に竿の手元を握り、こまかく揺すったり、軸を廻したりして穂先の動きを調べ、おもむろに炭火であぶり、反りを直して、くだんの和竿を取り出し揺すり比べ、縁側の下の方置き場にしまった。後日、その中から和竿と比べて選んだ竿にリール取り付け用の金具・糸通しを木綿糸でしっかりと巻き付け、エナメルで覆って竿を使えるようにしていた。いよいよ新しい延べ竿の出番がきた。27)

### お供で江ノ島の釣り

江ノ島まで竿を運ぶのに私がお供として呼ばれ、自転車の荷台に竿を担いで乗り、二人乗りで江ノ島まで行った。当時の遊歩道路は車がまるっきり走っておらず、片瀬橋まで行った。しかし、栈橋は大変ぼろく歩いてやっと島に着いた。

鳥居を東に行き、二見の勘蔵さん(船を委託していた人)の前で、「今日は磯に行く」と云い、預けている竿一本とタモ網、磯釣り用の道具箱を受け取った。和田釣船・餌店でコマセ(釣りで魚を寄せるための撒餌)のサナギ(養蚕で製糸時に繭から生糸を取った跡に残った蛹)と岩イソメを買い求め、東の通り、島下を抜け盛り上がったオカイソの岩場を越し水道口の大きな波食湾にでた。ここは波が静かに寄せる場所で水深もあり、いろいろの魚が寄るので初心者が楽しめる釣り場だった。

まず持ってきた蛹を借りた空き缶に入れ、潰し棒で良く潰し、潮溜まりで海水を汲んで混ぜ、戻り波の吹きだしに投げ入れる。コマセは波の満ち干で段々と広がりながら沈み、これに魚が寄ってくる。この間に延べ竿にリールを付け、糸通しにミチイトを通し、端を二本結びの輪に結び、より戻しを付け、重りと釣鉤の付いたハリスを繋ぎ、下から三尋の所に浮きを付けた。釣鉤に父は叩いて潰した蛹の餌を付け、私のには岩イソメを付け、それぞれ噴出しに投げ込み魚を待った。

父の狙いはクロ鯛で、私は雑魚ようだった。私の浮は良く沈み、そのつど引き上げるが何時も餌をとられていた。

「早すぎる」の父の声に、浮が沈んでもほっておいたら、何のことは無く魚が掛かった。あわててリールでミチイトを巻くと魚は逃げようと下に潜り、幼稚園児の私には竿を抱きかかえるのが精一杯だった。父は自分の竿を置き、「さがれ」と言うので。竿を抱えたまま退くと、父はタモ網で魚を掬い上げた。魚は15cm程のメジナ、父は釣鉤から外すと「可愛そうに」と云い、海に投げ込んだ。

その後、何回かコマセを撒いたが新しい竿での初釣りの父にはアタリは来ず、私の方は小魚に餌ばかりとられ3時間ほどの釣りは小さなメジナだけに終わった。初めての江ノ島での釣りは、こんなものだった。本当は小さくても家に持ち帰り、自慢したかったのだが。

## 七里ガ浜沖での釣り

家には買って来た暦があり、父は度々、潮時を調べていた。また天気予報はほとんど当てにならない時代のことで庭に出て雲行きを調べていた。

ある休みの前の晩、父はそうめんを小鍋で茹でていた。翌朝早く起こされ、江ノ島に行くことになり木箱を持たされ自転車の後ろに乗った。勘蔵さんの家に着き自転車を止め、その脇を通り東浜に出ると、そこは岸壁で縄と板木で出来た階段があり、船が舫ってあった。

船に乗り込むと、持ってきた箱からそうめんを取り出し、勘蔵さんの用意したシラスと混ぜ、平たい空き缶に小分けした。舫い綱を解き、勘蔵さんの艀漕ぎで、七里ガ浜の沖の根で錨を下ろし、舫った。その日は鰯釣りだった。手杵(約25cm角の木杵)に道糸・サル間・道糸・ビシ・ハリス・釣鉤の仕掛けが巻かれていた。

先ず、釣鉤に擬餌のカワ(魚の皮を乾燥したもの、イナ・ホウボウ・フグも使う)を引っ掛ける。そしてビシだが鰯ビシと鯖ビシは殆ど同じで、鋼の二股の天秤(鋼の2尺ほどの針金を二つ折りにして中間に円錐の鉛の重りを付け、折り目と両先端にサルカンという撚り戻しを付け、上は道糸、下はハリスを繋ぐ)の上と重りの間に銅線・真鍮線で作られた小さな網籠が付けられている仕掛けであった。

ビシにはコマセを入れて魚の生息の水深で揺るとコマセがこぼれ、これに魚が寄る。このビシにそうめんとシラスのねりを詰め、船の舷から静かにおろす。そしてビシが海底に当たったら一尋半ほど引き上げ、手元のミチイトに結びの印しを付ける。ミチイトをツンツンと上下してビシを揺すり魚を寄せ、擬餌を食らうのを待つ。

これは手繰釣りで、ミチイトを握った手で当たりを感じたら、釣掛けにツンとミチイトを引き、仕掛けを引き上げる。水深が結構あるので舷側に渡してある竹竿のスベリに滑らせてビシを揚げ、漁獲となる。

鰯と鯖は時期がずれるが、すっかりいなくなるわけではなく、その日も鯖が何本も上がった。一番困るのは河豚ッ子(フグ)だった。当たりが殆ど分からずに、あの鋭い歯でいつの間にかハリスを切られているのだから。

## 釣りキチとして近所で評判

この日は大漁だった。釣った魚は自分で調理の下ごしらえまでしなければならぬ我が家の決まりがあった。鰯は三枚におろし、刺身・叩きに、腸(わた、内臓)を抜いて煮付け用に、開きにして塩をふり干物用にと結構家での需要はあるのだが、当時は氷の冷蔵庫で限界があった。

そこで、父は磯場にいる漁師のオカミサンたちに惣菜用に鯖を分け、計算して余る魚は帰りがけの林邸・佐伯邸・斉藤邸などの台所に届けた。

＊

朝日新聞の「天声人語」でお馴染みだった故荒垣秀雄氏が、こんな父について次のように書いている。

——内藤さんの釣りキチぶりを藤澤かいわいでは知らぬ者はモグリだよと地元ではいわれた。未明に起きて自転車で船宿に駆けつけ、舟を出させて糸を垂れる。それが春夏秋冬で冬の寒い日でも休まず、湘南電車に乗り合わせると、ツリ自慢話をきかされた。大漁の時は隣近所に配って歩くのも有名で、朝の出勤前にあちこち配給するので、お蔭で「湘南の魚価」を安からしめた。茅ヶ崎のぼくの家までハイヤーを使ってキスなど届けてくれたこともある。そんなわけで彼の釣りはずいぶん高いものについたようだ。——

### キス釣り

春先になると、西浦から西浜、鵠沼海岸にかけて、白ギスが岸辺に寄って来た。早朝の浜からの投げ釣りはもちろんだが、小田急の片瀬江ノ島駅前の弁天橋際の船七釣船店に寄り船を仕立て浜に出た。仕掛けは家からすべて持ってきている。餌はゴカイで片瀬川の河口を出て西浦から西に船を流しながら釣りをする。魚は波のブレイク(崩れる)する少し沖に寄っているの、船はその位置へ向うが、そこはうねりがピークで船は良くゆれ、船酔いを起こす。

キス釣りは鰯釣りと同じに手繰釣りが主だが短い竿釣りもする。仕掛けは鰯と同じ型の天秤を使うが、ビシは無く、重りは大きめになる。そして、天秤をツンツンと砂底に落とすと砂の中の虫やプランクトンが舞うので、これがコマセ代わりとなる。水深は三、四尋なので、当たりはよく分かる。

竿釣りは女竹を裂いて一尋ほどの竿を削り出し、手元の先に一寸の串を五寸間隔で立てミチイト掛けにして、先端の糸通しと途中に二箇所を付けると完成。最近ではガラス繊維の強化プラスチックの竿にスピニングールでの竿で船の舳先に乗り、天秤を引き寄せての釣りが多いようだ。

この釣りで困ったことは、外道のメゴチがかかることであつた。この魚は天ぷらにすると大変美味しいのだが、体にヌメリがあり毒は無いが鰓先に棘があり、その上、キス鉤をよく飲み込むことだった。

ヌメリ、これの対策は雑巾、氷挟みを用意しておくこと。キス鉤を外すには外具(はずし具、釣具店で販売)あるいは長浮を突っ込みハリスを振って引き出すか、

ハリスを切りキス鉤を付け替えることである(調理の時に回収する)。

## 太公望の父

こんなことで釣りを父から教わったのだが、父は1940(昭和15)年9月、新たな仕事の準備のため南米ブラジルに行き、帰国後に太平洋戦争が勃発、大本營の特命で南方軍に派遣されて、釣り三昧は中断となった。

ところが、父はこの間も釣りを続けていたことを書き残していた。

——兎に角、寸暇を得れば(作っては)続けてきました。遠くはラプラタ河やサントスの島、クリストバルの船着場、バンコクの池もペナンの岸、一応足の駐るところでは糸を垂れて、旅情に趣きを添えてきました。——

1945(昭和20)年10月に最後の奉公の仕事を終え、除隊になり、銀座の店の復興に取り掛かった。その矢先、GHQからの召喚が切っ掛けで、いくつもの仕事の要請があり多忙だった筈だが、

——なんといっても、すばしっこくて、お利口な日本のお魚が頼もしい、釣れても釣れないでもの心境で、工夫とお付き合いが楽しくて、庭の東天紅(ながなきどり、後に江ノ島植物園の動物園に寄贈)と四時半に目が覚め、家族の安眠を妨げるよりはと、抜け出し磯巡り、空は佳し、波は良し、ここに総てを忘れるひとときが待っている。——

こうして父の朝の一時の江ノ島通いが再開された。

——古い顔ともなると有難いもので、誰と名指さなくとも、手の空いた漁師が船を出してくれます。

あかねに染った東の空、やがて三浦半島にお日様がニッコリと遊ばす。西の海には伊豆、箱根の嶺々に聳えて富士の麗姿を眺めるのです。嬉しいですね。凡俗の夢を断ち、総てを忘れて糸一本に魚信をたずねるの境界は天上天下是好也といわん。文字通りに俗塵を離脱して、一人あるの悦びにひたることができるのです。

富士にかかる雲を見て、漁師は天候気象を予知します。ナライ(北風)が強くなったり、南が吹込んだり、西に変ったりと素人漁夫には知るよしもなく、早目、先手と疲れを知らぬ前に見切りをつけて未練を残さない。舟のカメに獲物があろうがなかろうが、サッサと引き上げて帰るところに仙漁の味があるというものでしょう。——

そして、家の者から、最早一人で磯に立たれるのは心もとない。船頭さんと一緒にいてくれれば安心とささやかれるのを聞き、私のお供も再開となった。



## 戦争末期の江ノ島

戦時中、江ノ島通いは中断、その間に島も変わっていた。戦争末期は島民以外、島には入れなかった。戦後いち早くに、兄達に連れられて砲台跡 28) 29) の探検(のぞき見)に行き、見つけた大砲、砲弾に驚きながらも、少し安全な導火線(太さ 5mm×30cm の棒状)を失敬して、海岸でロケット遊びに興じたものの、他は見えていない。

お供で行った江ノ島、関東大震災の復興で出来た護岸・堤防は 1938 (昭和 13) 年 9 月の猛台風で大きな被害を受けたようで、あちらこちらで倒壊していた。

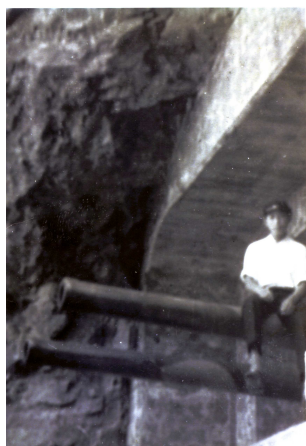
磯釣りは島の南・西浦のあちこちの波食の入り江に行ったが、多くは離れ島のスズキ島、鵜島などに、戦争で片手を無くした船頭さんの送り迎えの渡しで行った。私のお供は父の日課の朝釣りよりも、休日が多く、魚の食いの良い夕刻、夜釣りもあった。このような時は得てして急に西風が強まり、磯を歩くことが出来ずに高い崖をよじ登ることもあった。30)

## 江ノ島の魚はグルメ

当時の江ノ島の魚は大変グルメで、その時期時季の一番旬の餌を食べていた。

このことについて父は、

——釣れる、釣れないは時の運である。日なみは良し、水色は良し、時刻はよし、はて餌は？ 色の季節感をねらって餌をえらぶのは釣り師の常識である。「海老鯛」のコトワザがあるが、その海老にもシュンがある。海老が育った時は鯛が跳ねついて食うときにあたるが、鯖ガニの泳ぐとき、烏賊のうまい時を魚はそれぞれご存知である。その季節の魚の季節感をとらえて、エサの苦労に憂き身をや



28) 江ノ島の西浦北の砲台、15.5 糶砲の砲身  
1945(昭和 20)年 9 月 15 日 立田公雄氏撮影



29) 江ノ島の東浦南の砲台、25.0 糶高射  
機関砲の銃座。立田公雄氏撮影



**30)** 右下がヤマフタツの崖、この下に長磯の釣り場があった。ここへは稚児の淵から廻って来るが、西風が強まると戻れなくなり、この崖を上った。手前のウワミチに中村羊羹店がある

つすところに面白味がある。

春さきの鱸になくてならぬ海老ッ子は、魚ならずもこちらがこれはうまそうだなと見とれてしまうような容色と生気。だからタイもくればハタも喰うのは無理もない。＜補足：釣りの前々日に父は銀座4丁目の新富すしに小振りの生き車海老を築地市場で仕入れておくよう頼んで、前日の帰りに持ち帰って来る。またシラスの禁漁の無かった時代に12月に朝シラス挽き舟に舷寄せして、網に入ったメソッコ(うなぎの稚魚)を分けてもらい西浦での鱸釣りに使っていた＞

サナギでクロダイをねらうのは四季を通じて手にはいりやすく、季節知らずで撒餌についているのだけれど、藻海老で釣れる時や、イソメ(岩いそめ)にくる時は、産卵期の直前だと漁師はいう。

夏の炎天に磯辺に糸をたれるや否や、河童どもに竿さきにシブキを上げて跳び込まれるのには迷惑至極ではあるが、魚の方では少しばかり柄の大きい仲間ほどにしか思わぬらしく、むしろ河童どもの西瓜の食い端や、物の食べがらに餌付いてしまって、西瓜や梨のきれで釣れることもある。

柿の色づいた十月、庭の柿をむしり取って、四百匁ぐらいのクロダイを上げたり、晩秋さつま芋(太白)に甘味が増すころともなって、さいの目の芋で大物を

上げるのは毎秋の期待であり楽しみにもなっている。

うまくて香りがよいから餌付ければ必ず来ると確信して、当時まだ高価なバナナだけれども、毎日通いつめて、意地になってかぶせ込んでみたが、いつかな来ない。クロダイは舶来を心よしとせぬ国粋派なのか。はたまた季節知らずのバナナではお気に召さぬか、ついに目的を達したことがない。

魚の季節感をにらみ合わせて餌を選んでみたが、潮ゆきが条件に合わないと、魚の回遊性に逆らうことになる。場に行かないと漁師にも潮ゆきはわからないから、まことに始末が悪く、泣きどころというべきである。

磯や浅瀬では潮の干満は重要な条件ではあるが、沖合いでも潮ゆきが合わないと、場にも当らず、棚もとりに難く、漁師たちの一番気を使うところでもあり、腕の見せどころでもある。また漁師はお客に釣らせてみやげを持たせねばならないが、一日中歩き回っても魚が当らず、あせればあせるほど、潮ゆきに合わず情けなくなるときもあるといっている。商売となるとつらいものである。

春さきの冷たい朝まだきから、スズキを狙う定置網にとりついて、水ッぱなを拭きながら声さえひそめる思いで竿さきを見つめる。

当りをみて合わせると、ダダッと押えるような引き。身内の緊張を竿さき一本に集めて、思わずシメタとまではよかったが折角合わせた大物（落とした魚は大きい）に定置網に逃げ込まれて取り逃がす。泣くにも泣かれぬ口惜しさと、からみ込まれた道糸を手繰る惨めさ。ちょっと他人さまには見られたくない景色であるが、これみな潮ゆきの仕業である。

条件は申し分ないといっても、はてさてまならぬは魚の虫のいどころであろう。魚の気持は知らないけれど、上げ膳、すえ膳でかゆいところに手の届くような最高の待遇をもって、お気に召さぬこともあってか、思うように神輿を上げてくださらぬ時もある。マキ餌に群がる河豚ッ子(フグ)をかき分けてのアジ釣りや、メゴチをぬけながら釣るキスなど、癪にさわると邪魔だては誰しも経験する自然のたわむれでもある。――

### 盛んになったトローリング

江ノ島の漁船繫留場の拡充はディーゼルエンジン、ガソリンエンジンの船外機の普及、FRPプラスチック製船艇の普及により、遠出の船釣り、特にトローリングの釣りが盛んになった。このトローリングには疑似餌(ルアー)が用いられるが、初期には象牙や水牛の角の加工品に鳥の羽を付けて使われた。また、各種のイタと言う仕掛けを付けて、擬餌を潜水させて、魚の水深に合わせ釣りを楽し

んでいた。

1963(昭和 38)年当時、エボシ岩周辺まで引き釣り(トローリング)をしていた。父の自慢は象牙の先端部で作った擬餌で、海水中を引きずるとピンクに光るので魚がよく掛かるとのことだった。

——誕生祝いに尾頭つきを五本ばかりの注文を受けて、秋たけなわにイナダのふとる時期、暁の海に出る。鷗の群(トリヤマ)を追ってグンと竿に来る。40センチ近いイナダをまず一本。幸さきよし、波を蹴立ててナムロに突っ込むと、来る、来る、ひとしきりは戦場のように忙しい。一段落、また鷗を目指して突っ込む。

釣れる。果てしなく釣れる。九時の上りで東京に持って行くのだとかたくいわれて、ご機嫌の漁師の顔と釣れる魚に未練を残して、早くも七時に帰るつれなさはお察しにまかすとして、漁果は計 36 本。多過ぎた。あとはヨロシクと頼んで、二十本どころを持って大急ぎで帰る。帰る途みち投げ込んで家には三本で、ちょうど始末のつく勘定になり、ご注文の品は滞りなく整ったが、納まらないのはこっちの腹の虫である。ひそかに明朝を期した。

ほのぼのと白むころ家を抜け出て、あかねに明ける東の空を背に威勢のよいエンジンの音で走るとベタナギである。

場に着く。来るか、鳥も見えない。ナムロも出ない。場を替えても走り回っても来ない。行くときの意気込みに引きかえて、手持無沙汰に船尾に立つ張りのなさは、ナギの海に残す舟跡ばかりである。

昨日にかわる今日のみじめさ、自然の戯れは斯くの如し。——

ここで、もうひとつ冬のトローリングを紹介すると、船の両舷に太い竿を出し、大きなイタを付け七里ガ浜の沖をゆっくりとトローリングする。このイタは頭に大きな板鉛が付いていて、引きずると海底に沈むので底にいるヒラメが飛びついてくる。大きいイタで、当たりは鈍いが、板は海面に浮かんでくるので、それからの引揚げで間に合う。このトローリングはハウボウ・コチ・アマ鯛が掛かった。

今回は江ノ島とその近辺での釣りについて述べてきたが、次回は鵠沼海岸での浜釣りを取り上げてみたい。

(ないとう よしつぐ)

### 益田家のシャンデリア

賀来神社の鵜沼海岸別荘地開発記念碑に刻名のある男爵益田孝の三男、益田信世の別荘跡地は昭和 32 年に分譲宅地として開発され三井不動産から販売された。

開発面積 3,723 坪、うち道路面積 415 坪、宅地面積 3,308 坪は 36 区画（平均約 90 坪）に分割され、坪単価はおおよそ 9,500 円であった。

益田孝は三井財閥の大番頭で鈍翁と号し茶人としても名高い。信世は初代小田原市長を務めた人である。岸田劉生『村娘於松』のモデル川戸（旧姓・葉山）マツさんから、私の姉は益田様へ下働きに伺っていた、と聞いたことがある。

その 36 区画のうちの一区画に私は住んでいる。20 年ほど前、植樹のため庭をすこし深く掘ったところティアドロップ（涙の雫）型にカットされたクリスタルガラスのシャンデリアの一片が出て来た。



益田家のシャンデリア



米軍の航空写真

戦後まもなく米軍が日本全土を測量用に空撮した。その鵜沼の写真を見ると、丁度、拙宅の辺りに母屋があったことが分かる。それで、我が家ではこの一片を「益田家のシャンデリア」と称して、その場に植えた桃の下枝に吊し、陽の光にキラキラと輝くのを日毎愛でて居るのである。(T.O)



**コーヒーブレイク Coffee Break コーヒーブレイク Coffee Break コーヒーブレイク**

**酉年に思う**

昨年は申年、私の干支は申で昨年、申に因む言葉を考え記しましたが、私の申年は多事多難の年で去って行きました。が、反面、省みると多くの方と接し温かい言葉に教えられたこともあり若干負が残り、自己の弱さを今年克服と反省を兼ね心せねばと思いつつも目下の所、信念に及ばず狡賢い猿に似た存在を反省し(?)、歩んでいます。

今年は酉年、大変縁起のよい干支と云われています。酉は人に刻を知らせる動物でもあり、しっかり時を刻み大きく羽を広げ羽ばたく未来志向と云われています。併し酉にまつわる言葉をいくつか調べて見ました。江戸時代の俳人が「あの声で、とかげ食らうか、ホトトギス」、あんな美しい声で鳴くホトトギスがとかげを捕えて食べるとは、人は見かけによらないとの意だそうです。上辺だけで人を判断すると間違うとか、雀おどして鶴失う、雀を追ひ払おうと躍起になるあまり鶴を逃がしてしまう、所謂、細かいことに拘わって全体を駄目にしてしまう例え、鶇の真似をする鳥は鶇も鳥も黒い鳥で外見は似ているが鶇が泳いだり潜ったりするのが上手なのに鳥は上手に泳げない、能力のないものが人真似しても失敗するだけの言葉、格言と云われています。鶇のようにコツコツ努力を重ねて飛躍の年にしたいと願うのは、日々本人の覚悟と真意かと思いますが如何に！ 因みに私達は「とり」と云う言葉を酉年とは別に、日常茶飯事に数多く使用していることを考えたことがありますか

とり敢えず    とり扱う    とりこ    とり換える    とり急ぐ    とり肌  
とり押さえる    とり巻く    とりで    とり交わす    とり消す    とり箸  
とり纏める    とり囲む    とり目

鳥一羽    今日のねぐらは    何処かな  
寒き夕暮れ    森見つめつつ

電線に    小雀数羽    止まりたる  
さえずる声に    健やかなれと

(綿谷 克延)

**コーヒーブレイク Coffee Break コーヒーブレイク Coffee Break コーヒーブレイク**

# 芥川龍之介の中国旅行と「手帳」

神谷 祐太（会員）

私は 2016 年に「鵠沼を語る会」に入会、現在、東北大学・大学院の博士課程に在学しています。修士論文では大正期に中国を旅行した日本人について取り扱いました。そのときは気づいてはいなかったのですが、作品を取り上げた芥川龍之介と谷崎潤一郎の両名が、まさに私自身が育った鵠沼と所縁があることを後に知り、より深く鵠沼の歴史について学びたいと考え、入会するに至りました。

さて、本稿では芥川龍之介の中国旅行と鵠沼のつながりについて簡潔に述べます。鵠沼郷土資料展示室に所蔵されている手帳のコピーと、私が研究している芥川の中国旅行との間に、密接な関係がみられたためです。

## 『支那遊記』

芥川龍之介は 1921（大正 10）年 3 月、大阪毎日新聞社海外視察員として中国に派遣されています。芥川は門司港から上海へ渡航し、約 4 か月間中国各地を訪問しています。『支那遊記』とは、この旅行の際に、芥川が記した日記をもとに、帰国後、『大阪毎日新聞』及び『東京日日新聞』に連載された『上海遊記』と、翌年『大阪毎日新聞』に連載された『江南遊記』を合わせて、1925（大正 14）年、改造社から出版された紀行文を指します。

上海では現地で暮らす毎日新聞社の関係者や、旧知の間柄であったロイター通信の記者トーマス・ジョーンズの歓待を受け、彼らと行動を共にしていた様子が記されています。しかし、芥川は体調を崩しており、上海は病氣療養も含めて約 3 週間滞在しています。

この旅行記の中で、芥川は、奇しくも同じく鵠沼の縁故者でもある谷崎潤一郎についても言及しています。谷崎潤一郎もまた大正期に二度、中国へ渡っているからです。1918（大正 7）年谷崎は朝鮮と北京を中心とした中国東北部を、その 8 年後の 1926（大正 15）年に今度は上海を中心とした中国南部を旅行しています。芥川は谷崎あるいは彼の著作をしばしば引き合いに出し、当時日本で隆盛を極めた「支那趣味」ブームについての考察を披露しています。

芥川がこの中国旅行から帰国したのちも、『影』（1920）、『奇遇』（1921）、『仙

人』(1922)、『湖南の扇』(1926)、「澄江堂遺珠」(未定稿)など、中国を舞台にした小説を複数発表しています。

さて、この旅行から5年後の1926(大正15)年に、芥川は鵠沼を訪れています。この旅行中に、重い病に蝕まれたことは既に触れたとおりですが、彼は中国の街頭で阿片吸飲者を目撃する機会も得ていたようです。このことから、鵠沼時代の芥川の身に生じた体調不良や薬物依存の予兆が、すでにこの頃から表れていたことが指摘できるのです。

### 「手帳」

芥川は大阪毎日新聞社より、旅行中に起きた出来事を克明に記すよう、指示を受けていたようです。その手帳のコピーが、鵠沼郷土資料展示室に所蔵されていたため、現在、複写を大学に持ち帰り、鋭意解読を進めております。

メモの文章自体は、岩波文庫の『芥川龍之介全集』(初版)にも、活字化された形で収録されているものの、判読不可能な個所を含む文章の削除や、固有名詞と思われる部分が伏せ字になっているなど、不明瞭な点が目立ちます。また原本が永らく遺族の所有であったため、資料として取り上げられる機会が少なかったようです。

今後、「手帳」の内容について、解読をすすめるとともに、出版された紀行文とメモ書きの間にいかなる異同が見られるのかについて調べていきたいと考えています。また、手帳の記載を読み解くことにより、より明確な旅程や訪問先が明らかになることが予想されます。くわえて、帰国後に発表された中国を舞台とした小説と取材ノートとの関連性などについても精査していくつもりです。新たな発見があり次第、追って本誌にて発表したいと思います。ご期待ください。

(かみや ゆうた)

参考文献：

芥川龍之介『上海游記・江南游記』(講談社 2001年)

谷崎潤一郎『上海交遊記』(みすず書房 2004年)



## 全国に鶺鴒を追う (第 0006 話)

### —クグイ・クグ地名分布とその特色—

渡部 瞭

**はじめに** 小林政夫会員から「渡部さん、これ面白いですよ。使ってみてください」と、1枚のCD-ROMを手渡された。『地図で見る 日本地名索引』という(株)アポック社(鎌倉市大船)の製品で、国土地理院の1:25,000地形図に掲載される地名が、その位置(経緯度)やふりがなを含めて検索できるものである。現行の地形図に基づいているため、消えた地名(例:砥上ヶ原)や最近の大型合併で生まれた市(例:南アルプス市)を検索することはできないし、ごく狭い範囲の、地形図に載せられない地名(例:鶺鴒花沢町)は省略されている。早速これを使って、以前から気になっていた「鶺鴒」のつく地名がどこにあるのかを探してみることにした。

**鶺鴒とは** 鶺鴒の意味については、『鶺鴒』第110号の小林会員の文にも詳説されているし、以前、『鶺鴒』第12号で故伊藤節堂会員が『鶺鴒の「クグヒ」』と題するかなり詳細な考察を発表しておられる。伊藤会員はこの中で「鶺鴒のつく地名」として①茨城県の「鶺鴒戸(くぐいど)」「鶺鴒戸沼」、②埼玉県本庄市の「久久宇(くぐう)」、③富山県新湊市の放生沢潟近くの「久久江(くぐえ)」、「新久久江」、「久久湊(くぐみなと)」の3箇所を紹介されている。

**鶺鴒地名** 『地図で見る 日本地名索引』を検索して得られた「鶺鴒」のつく地名を表示してみると、

| ふりがな                                | 漢字地名  | 県名  | 経度 緯度            | 掲載地形図名  |
|-------------------------------------|-------|-----|------------------|---------|
| くぐい                                 | 鶺鴒    | 徳島  | 134°37'E/33°51'N | 馬場／橘    |
| くぐいがわ                               | 鶺鴒川   | 徳島  | 134°37'E/33°51'N | 馬場／橘    |
| くぐいど                                | 鶺鴒戸   | 茨城  | 139°52'E/36°02'N | 水海道／宝珠花 |
| くぐいどぬま                              | 鶺鴒戸沼  | 茨城  | 139°52'E/36°02'N | 水海道     |
| くげぬま                                | 鶺鴒沼   | 神奈川 | 139°29'E/35°19'N | 江の島     |
| ※鶺鴒沼海岸・本鶺鴒沼などの住所表記も出てくるが、周知なので省略する。 |       |     |                  |         |
| こうのしり                               | 鶺鴒ノ尻  | 石川  | 136°46'E/37°21'N | 皆月      |
| こうのす                                | 鶺鴒ノ巣  | 石川  | 136°57'E/37°23'N | 輪島      |
| こうのもりやま                             | 鶺鴒ノ森山 | 岡山  | 133°30'E/34°46'N | 高梁      |

これ以外にインターネットで検索すると、京都市内に鵜坂(くぐいざか)という地名もある。これをご覧になって「たったこれっぽっちか」と思われるのも「案外多いな」と感じられるのも自由だが、鵜は鵜沼の専売特許ではないのである。しかし、これを「くげ」と読むのは鵜沼だけのようだ。「こく」とも読まない。「くぐい」か「こう」である。

**クグイ地名** くぐいは鵜の漢字ばかりでなく「久々井」などと表記される場合もある。これにはいったいどんなものがあるだろうか。

| ふりがな   | 漢字地名 | 県名 | 経度 緯度            | 掲載地形図名 |
|--------|------|----|------------------|--------|
| くくい    | 久々井  | 岡山 | 134°05'E/34°35'N | 西大寺    |
| くくい    | 久々井  | 岡山 | 134°11'E/34°42'N | 片上     |
| くぐい    | 久々井  | 岡山 | 133°39'E/34°32'N | 玉島     |
| くぐい    | 久々井  | 岡山 | 134°05'E/34°34'N | 犬島     |
| くぐいさき  | くぐい崎 | 宮城 | 141°39'E/38°51'N | 唐桑     |
| くくいたお  | 久々井峠 | 岡山 | 134°11'E/34°42'N | 片上     |
| くぐいたわ  | クグイ峠 | 岡山 | 133°46'E/34°28'N | 下津井    |
| くぐいとうげ | 久々井峠 | 岡山 | 134°04'E/34°35'N | 西大寺町   |
| くぐいとうげ | 久々井峠 | 岡山 | 134°11'E/34°42'N | 和気     |
| くぐいとうげ | 供御飯峠 | 京都 | 135°41'E/35°06'N | 周山     |
| くくいわん  | 久々井湾 | 岡山 | 134°12'E/34°42'N | 片上     |

「久々井」は岡山県に集中していることが判る。「くくい」と読む場合と「くぐい」と読む場合とがあるが、近接して双方が見られることから、同一視してかまわないと判断したい。面白いのは京都府の「供御飯峠」である。なんだか曰くありげな表記だが、ハクチョウからの意味が漢字を当てはめるときに変化したとも考えられる（小狭間→伯母様などその例は多い）。

**クグ地名** 先述の伊藤節堂会員が紹介している地名に「久久宇(くぐう)」「久久江(くぐえ)」などがある。これらの場所では、地名の由来としてハクチョウとの関係を挙げているものが多い。

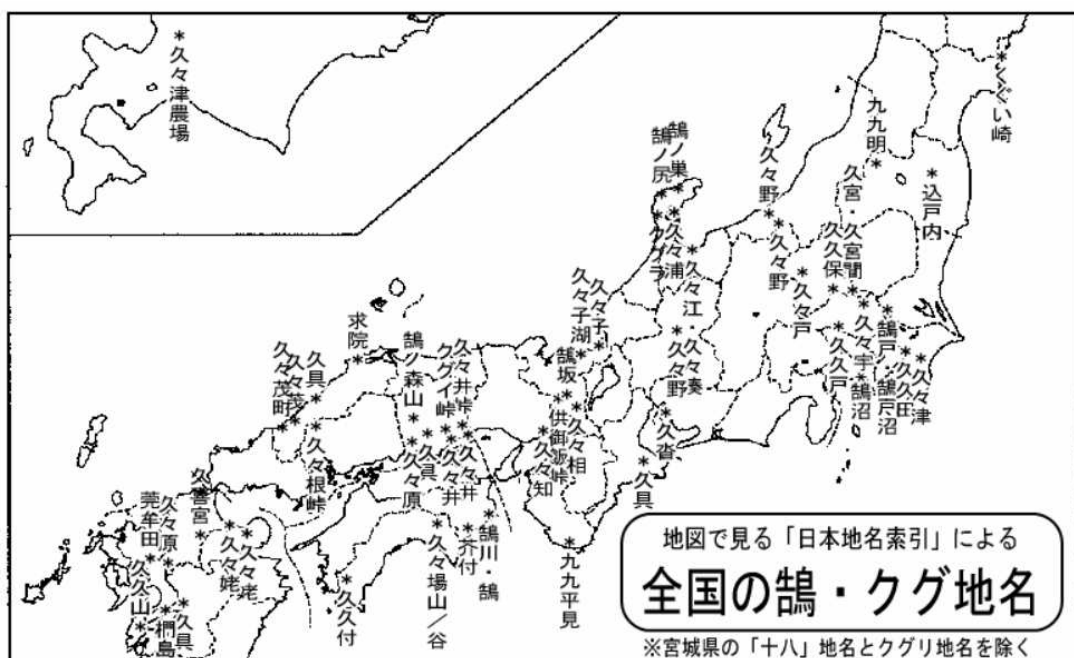
では、「クグ」のつく地名はどれぐらい見つかるかというと、先述の「鵜」「久々井」を含めて80ばかりが挙がってくる。これを例によって列記すると、それだけで2ページ以上を費やしてしまうので、県別に数をまとめてみた。但し、「クグリ」で始まる地名は除外した。ハクチョウとの関係がなさそうだからである。なお、このソフトでは検索できなかったが、岐阜県高山市に久々野町という町名があることがインターネット検索で判明した。



熊本県=3、佐賀県=1、福岡県=3、大分県=2、高知県=5、徳島県=4、広島県=2、島根県=3、鳥取県=1、岡山県=11、兵庫県=2、京都府=2、和歌山県=1、三重県=1、愛知県=1、岐阜県=5、福井県=2、石川県=2、富山県=2、新潟県=3、群馬県=3、埼玉県=2、千葉県=2、茨城県=2、福島県=3、宮城県=7、北海道=1

岡山県=11の大部分は先に紹介してある。北海道の1例は「久々津農場」というもので、経営者の姓か出身地から採ったのだろう。宮城県=7というのが目立つが、これは「十八成(くぐなり)(鳴)」という難読地名が大部分である。種明かしをすると、いわゆる鳴き砂現象が見られる砂浜で、「クク」と鳴ることから 9+9=18 という判じ物だという。で、これはハクチョウ関係ではない。

あとは1~5箇所ずつで、25府県にわたる。これを地図上にプロットしてみた。



これによると、宮城県から熊本県にわたって全国に分布するが、かなり粗密が見られる。その分布範囲は、飛鳥時代以前の初期大和朝廷の勢力範囲に一致する。すなわち、南方の熊襲(くまそ)、北方の蝦夷(えみし)という勢力を征圧する以前の範囲である。

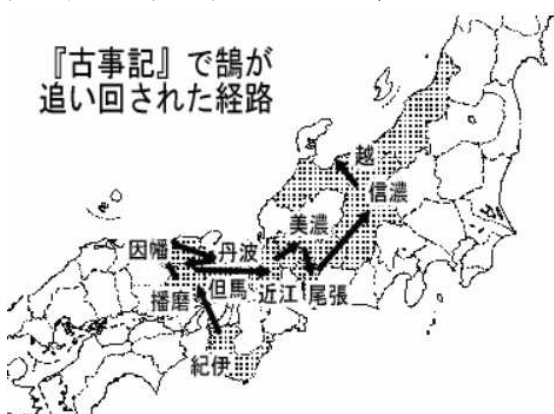
倭語(やまとことば)における「くぐひ」とは、ハクチョウを意味し、漢字の同意語の「鵠」が充てられた。また、「くぐ」とは、カヤツリグサを指す場合があるので、クグのつく地名がすべてハクチョウと関係するわけではないが、クグ地名のみられる多くの場所で、地名の由来としてハクチョウとの関係が伝えられて

いることもまた事実なのである。他に埼玉県熊谷市の久下(くげ)にも同様な由来が伝えられる。

**記紀と鵠** 「鵠」という漢字は、滅多に使われないが、日本に漢字が伝来し、一般的に用いられるようになった段階から既に使われている。

『日本書紀』によると、伝説上の11代垂仁天皇の子誉津別皇子(ほむつわけのみこ)は父天皇に大変鍾愛されたが、長じてひげが胸先に達しても言葉を発することがなく、赤子のように泣いてばかりであった。皇子はある日、鵠(くぐひ)が渡るさまを見て「是何物ぞ」と初めて言葉を発した。天皇は喜び、その鵠を捕まえることを天湯河板拳(あめのゆかわたな)＜鳥取造(とりのみやつこ)の祖＞に命じる。彼が出雲で捕まえて献上し、鵠を遊び相手にすると、誉津別命は言葉を発するようになった。ここに鳥取部(ととりべ)、鳥飼部(とりかいは)、誉津部(ほむつべ)を設けたとある。

一方『古事記』では、誉津別皇子についてより詳しい伝承が述べられている。天皇は尾張の国の二股に分かれた杉で二股船を作り、それを運んできて、市師(いちしの)池、軽池に浮かべて、皇子とともに戯れた。あるとき皇子は天を往く鵠を見て何かを言おうとしたので、天皇はそれを見て鵠を捕らえるように命じた。鵠



は紀伊(和歌山県)、播磨(兵庫県)、因幡(鳥取県)、丹波(京都府/兵庫県)、但馬(兵庫県)、近江(滋賀県)、美濃(岐阜県)、尾張(愛知県)、信濃(長野県)、越(福井県/石川県/富山県/新潟県)を飛んだ末に捕らえられたとある。

これを地図上に表してみたのが上図である。そのルート of の多くにクグ地名が見られることに注目したい。

**おわりに** 数年前、鳥取県の「米子水鳥公園」を訪れた。ここはコハクチョウの集団越冬地としては最南端という。訪れたのは初夏でコハクチョウは繁殖地の北極海沿岸に帰っていたが、眼前に展開する湖を眺めながら古墳時代の川袋一帯に見られたという「古鵠沼湖」ともいうべき湖の拡がりに思いを馳せた。鵠沼とは白鳥の湖だとの確信が得られる思いがしたのである。(わたなべ りょう)

＜故渡部瞭会員『鵠沼を巡る千一話』第 0006 話より＞

# プレイボーイ

(後篇)

今井 達夫

大分寄り道をしたが、馬座が木部のすすめた青年将校たちと逢う機会を持たずにすました理由は前述したが、しばらくののち木部がさらに大きな転回をしたことを知った。この間の経緯事情についてはまったく知識のない馬座で、そういう政治的思想的な文学から強いて遠ざかろうとしていた立場であってみれば、青年将校たちの場合と同じくその転回を知ったというところに限界の線を引いたわけである。

しかし、馬座は木部が共産党にはいったことを木部自身から聞いていたのであった。どうしてそんな秘密を打ち明けたのか。いろいろ考えられる理由のなかに、こんなことも数えることができる。当時入獄中だった党の幹部の夫人が大森にいて、馬座が紹介したという縁があった。木部はすぐ親しくつきあうようになったが、そんなことが木部の入党にも、また入党を馬座に告げる理由にもなったのではないかと考えた馬座である。が、その夫人はその後間もなく自殺してしまったから、かの女からの証言は求むべくもない。

そして、シナ事変が起ると、木部は素早く上海に渡り日本派遣軍の報道部と結びついた。馬座がそれを知ったのは大分あとのことで、応召した若い画家が帰国して伝えたからである。だから、馬座は木部の上海における行動についてはまったく無知で、どういう筋を辿って軍の報道部と結びついたかなどは模索さえ不可能であった。

木部が上海から帰国したのは、昭和二十年の六月だったという。それについて木部はこういう説明を加えた。

「もう敗戦とわかったから、上海にいる意味がなくなったし、敗戦の混乱状態にまきこまれて帰れなくなる危険もあったからね。」

これだけでは敗戦とわかった経路もわからないし、上海での彼の役割については尚さらであるが、今となって知ろうにも手おくれである。その説明を聞いたときは、そういう質問を向けるべき空気ではなかった、といえは弁解になるが、馬座としては正直な心持である。

戦後、昔住んだ海岸町へ移っていた馬座の前にひさしぶりであらわれた木部は、

彼の消息に通じていて、先ず口にしたのはこういう申込みであった。

「江の島で観測気球を上げる会合をやったんだがね、足を出してしまったんだ。どうだろう、すこしカンパしてくれないか。」

その金額はいくらでもなく、その場で応ずることのできる程度であった。それからいろいろな話が交され、上海から帰ってきた事実を聞いたのである。

その日すぐ帰って行った木部は、三四日経つと蟹をたくさんみやげに持ってやって来た。

「これは稲村ケ崎の干潟でとったんだよ。うまいぜ。」

その蟹が先日のカンパの礼と気づいたのは、帰りにその蟹を入れた来た釣道具の箱をいらないよとおいて行ったからで、昔の木部のなかになかった律儀さを不思議な気分でかんじると同時に、馬座は寂しくも思った。

が、それは馬座の思いすごしかも知れなかった。木部に住居を訊くと、「極楽寺という寺があるだろう、あの寺の書院を借りているんだ。奥さん、ご同道でお出かけ下さい。おもてなしはできませんが。」

と、誘ったからである。その誘いのニュアンスには、そんな大人びた律儀さはいかんじられなかったからである。

鎌倉の極楽寺は稲村ケ崎にある。それであの蟹のみやげになったのかと推察した馬座は、もうひとつの疑問に当面しなければならなかった。木部が現在誰と一緒に住んでいるのか、二十数年前千瑛子と知り合ったのは稲村ケ崎の馬座の部屋であった、稲村ケ崎の極楽寺に住むからにはもしやという心持におそわれた馬座だったが、木部の口から千瑛子の名前は一度も出ていなかった。

まさかそうではあるまいと思いながらも住んでいる場所から千瑛子と結びつけたがる自分をためすみたいない気持ちで、馬座は極楽寺に木部を訪ねた。妻も同道したのは、木部の細君に好奇心を抱いたからである。そして、しきりに訊く妻に、「見当がつかないよ、木部のことだからね。」

と、答え、さらにその好奇心をそそり立てた。

友人たちと木部の噂をするのを興味を以て聞いていた妻である。千瑛子と駆落ちした話も知っていたから、馬座と似た疑問を持っているにちがいがなかった。

しかし、藤沢と鎌倉を結ぶ私鉄に乗って極楽寺駅へ近づくと、馬座は不意に十年ほど前銀座の喫茶店で逢った千瑛子を思い出した。それは昼間の喫茶店で、遠い席にいるかの女を見かけただけで、言葉を交すまでに到らなかった。向うも人待顔だったし、こちらも雑誌記者と待ち合わせていたからであったが、そのとき木部の消息を訊けばその上海行をずっと早く知ることができたはずであった。

そのときの千瑛子は、ひとのいい微笑を目にうかべたが、その微笑と珍らしくきっちりと和服を着ていた姿が、色濃く馬座の目にうかんで来た。それ以来、逢ったことがないのである。はたして現在一緒にいるのかどうか、馬座としては木部がその名前を口にしないのを否定材料にする側に立った。

極楽寺の門をくぐり、教えられて書院を訪ねた馬座が見たのは、二十数年前の千瑛子と同年ぐらいの若い女で、しかも、生れたばかりの幼児を背中におぶっていた、思いも寄らない光景であった。木部の子供は大阪で芝居をしていたひととのあいだにもひとりいたのを、馬座は知っている。その子供は木部の母親が育てていたはずだ。

木部の住んでいる部屋は、彼がことわたった通りひどく荒れていて、縁など気をつけなければ踏み抜きかねないありさまであった。そこに木部と若い妻と幼児の三人が住んでいる、昔の木部を知っている者にとっては信じられない光景であった。それにもかかわらずなんとなくおちついた安らぎがただよっている。馬座はこのひとは日本へ帰ってからみつけた細君であろうと推察した。

その日、木部は手打うどんを煮て馬座夫婦をもてなした。

「生憎、酒を切らしているのですね。なんだったら、買わせにやってもいいが。もちろんヤミ酒だよ。」

馬座はことわたった。この荒れはてた部屋で酒を汲むのは侘しいばかりでなくほとんどひとと言ひしやべらない若い細君に気がねをしたからでもある。

そのためもあって、極楽寺を訪ねたのはこのとき一度だけで、つまりこの木部の第何番目かの細君と逢ったのはこのとき一度だけの馬座であった。そのかわり、木部の方からはちょいちょい訪ねて来た。家を建てて住みはじめてからは、泊って行くこともあった木部である。馬座は震災前、十代のころのこの海岸町で一緒に遊んだ時代の思い出をメモしておこうと企てていたので、木部の記憶にもたよろうとしたが、木部は頭を振って羞かみに似た笑いをうかべた。

「終戦後、わるい酒を飲みすぎたんでね、すっかり頭をわるくしちゃってさ。記憶力なんかまるでゼロだよ。」

そんなふうに自嘲したが、どこまでほんとかと馬座は疑った。思い出したくないことがたくさんあるであろうことは察しがつくし、また、思い出すことを口にするのを控えたいであろう現在の立場についても同様で、その代り少年のころ一緒に歌った外国の歌などをうたってみせる木部に対して、馬座はある痛ましさをかんじなければならなかった。

そういうとき胸をおそうのは、木部の現在おかれている党内の位置立場につい

てである。そういう話題にはふれようとしない木部は、一体どんな考え方をしているのか、馬座の方でもそれにふれないことにしているから、ふたりの話題は木部が記憶のおぼろになったという昔のそれにかぎられているというべきかも知れなかった。

馬座が木部のそういう面にふれたのは一度だけで、中国から訪日した李徳全女史の一行が、この海岸町で溺れ死んだ若い作曲家ニエ・アールの碑を参拝するために訪れて来たときである。昭和十年ごろこの海岸町に住んで、遊泳中あやまって死んだこの作曲家の碑は戦後渚に近い砂浜に建てられたが、彼の作曲が中国の国歌として取り上げられたことから、有名になった。

誘われてその李徳全女史一行の参拝式に列席するため出かけた馬座は、迂闊にもその式場で木部と逢うことなど予想もしていなかった。だから、大勢の参拝者たちの群衆を整理している木部の顔を見出すと、その熱心な表情や姿態に対して理由のない羞恥を禁じ得なかった。どうしてそんな羞恥におそわれたのか、あれこれと胸のうちを探ってみたが、すぐにはわからなかった。そのうちに群衆の数が次第に増して来て、馬座は背を押されて前列に出た。

そのとたんに、馬座の視線が木部のそれと出合うと、馬座は思いがけないものを見た。熱心に整理をしていた木部の動作がふと動きをとめたと思うと、その表情がゆっくりと微笑し次にははげしい羞恥が顔中に走りのぼったのである。彼自身かんじた羞恥の理由を理解できないでいた馬座は、木部の羞恥にうろたえ反射的に微笑を返してしまい声にならない挨拶を送っただけで終わったが、帰途ひとりになると木部の羞恥がわかるような気がして、改めて微笑をうかべた。はるか昔少年の日の表情を思い出させたナイーブな羞恥の色は、馬座にとってなつかしい記憶と結びつく。

木部はあこのころの心情を失っていない。そう思えるのは、馬座にとってもなつかしみの情とともにその日の大きな収穫であった。

それと前後して馬座は木部の紹介状を持った青年の来訪をうけた。紹介状によれば、その青年はかつて木部が親しくなった党幹部の夫人の息で、ある新聞社を赤色ページでやめさせられた経歴の持ち主であった。

その手紙を読んでいる馬座に、胸中を悟ったみたいにいった。

「僕はもう党をやめましたけれどね、木部さんがあなたに逢ってみろとすすめてくれたのです。僕が幼かったころの話を聞かせていただきたいのですが。」

が、その話はここでは重要でないから省略するが、そのときその青年の口から出た木部評が馬座の胸に焼きついた。木部が党の仲間から「貴族的党员」と呼ば



れているというのである。馬座はその呼び名に共感をかんじた。精神的、神経的、日常の趣味的生活には世の常の貴族よりももっと貴族的な木部の風貌を思い描きながら。

その青年が訪ねて来たあと、追いかけるようにやって来た木部を、馬座は親しい気持で迎えたが、その「貴族的党员」という呼び名を口に出すにはすこしばかり骨が折れた。しかし、木部は笑って、

「貴族的なんて言葉にこだわるのは小児病さ。精神的賤民みたいなやつらのほびこっている現在じゃないか。そういう連中にくらべれば貴族的といわれるのを、むしろ、名誉とするね。君だってそうだろう？」

そして、近ごろある病院につとめていると伝えた。

「——ホラ、君も知っているだろう、大船と藤沢のあいだの田圃のなかにあるやつさ。」

それは大きな精神病院で、木部がそこに勤めているとは初耳であり馬座の好奇心を誘った。

「どういうことから勤めたんだ、また、どういう順序でだい？」

「一番はっきりした理由は、月給が欲しくなったからさ。院長に直接談判をしてきめたんだが、たったひとつ条件を出しただけで承知をしてくれたから、僕は院長に感謝している。条件というのは、病院内で共産主義の宣伝をしないことというんだが、もちろんこっちも承知したよ。」

「それはよかったね。」

馬座は嘘でなく喜びを告げた。正直な話、木部寅士が何によって生計を立てているかをずっと心配していなかったとはいえない馬座だったのである。終戦後いわゆる「文芸復興」の時期には、木部の亡父の本も出て木部はそれに思い出や註釈を書いたりする収入もあったようだが、そういう時期はすでに過ぎ去ったのである。定収入のある生活にはいったことは、木部の精神にもいい影響を与えるであろう。

その後、ロータリークラブのゲストスピーカアとしてしゃべったとき、馬座は震災前この海岸町にいた文人画家を紹介したが、そのとき木部寅士にふれると、講演のおわったあと、クラブの支部長であるその病院の院長が木部は自分のところにいると説明した。

「それは木部から聞きましたが、彼にやれる仕事とは一体どんなことですか。」

「現在やっただいているのは看護長というポストですが、あの方のこまやかな神経は患者たちの心理を理解するために、大変役に立つのでね。」

馬座はなるほどと思い、木部のためにさらに喜んだ。馬座は電話で打合わせて訪問した。

木部は白い医者の上っ張りを着て、馬座の前にあらわれたが、その長身と彫りの深い顔立ちとはぴったり板についていて、本職の医者以上にそれらしく見えた。そして、廊下を歩く靴音のリズムにも、自信ある看護長の姿勢があった。その靴音に案内されて幾棟かの病棟を見学した馬座は、病室の患者たちを観察すると同時に、木部に対しても同じことをやっている自分に気づかなければならなかった。

「洋服を着てくればよかったのに。そうすればこういう上っ張りを着せて、患者たちとの問答に立ち会わせただが。」

この言葉には、完全にこちら側に立っている者の自信の裏打ちがあった。

その晩、馬座は木部を町の料亭へ誘い出した。先に行った馬座が待っていると、木部は仕立てのいい背広を着てあらわれ、あけてある上座にためらうこともなく坐りながら、

「これは今日の案内役へのもてなしの意味かい？ 馬座英介もおとなになったものだな。」

そして立てた笑い声には、青年時代の若さがみなぎっていた。知り合ったころからおしゃれだった木部が、このごろ身につけることのできなかった仕立てのいい洋服を着ているのを見た馬座は、これも病院につとめている故かと、若若しい笑い声とともに会心の想いをかき立てられた。

「どうしても好きなように解釈してくれ。」

馬座もそんなふうに応酬してから、改めて礼をいった。「——しかし、とにかく得るところ多かったよ。君が腰に下げていた鍵ひとつにしても、全館の出入り口と病室とに共通だということさえはじめて知ったんだからね。」

「お役に立ったことを喜ぶよ。それにしても患者との問答に立ち合うチャンスを逃したのは惜しかったね。僕たちの想像もできない発想があるんだぜ。」

若いころもしかしたらこういう種類の病院の患者になっても不思議はない神経の持主だったと考えることは、むしろ彼の才能に対する感傷かも知れないと思い、馬座がそれを口に出すと木部は笑った。

「それは買いかぶりだよ。俺は天才と紙一重のものなんか持ち合わせていなかったんだ。」

馬座は不意に思い出した話題を、大いそぎでいった。

「昔、君とふたりで海岸の旅館に来ていた島田清次郎を訪問したことがあったね。島田がまだ外国へ行く前だったが、精神的にはおかしいところが見えはじめてい

たころだった。」

島田清次郎とは「地上」何部作かで突然世の中にあらわれた新進作家で。その才能は一時天才とまで持ち上げられたが、その後おかしくなり精神病院に収容されそこで死んだという不幸な運命の持主である。

「なんだ、そんなことを考えながら病室を見てまわったのかい？　ちがうよ、あすこには一人の島田もいなかったね、僕が勤めるようになってからは。島田の場合は現在ならああなる前になおすことができた病状なんだ。それが彼にとって幸福であつたかどうかは別問題として、だがね。」

その言葉は、同時に、木部自身に当てはまることもできるのではないかと馬座は思ったが、もちろん口には出さなかった。

が、馬座はその晩意外な収穫を得て、ぎょつとした。収穫などという云い方は礼儀に反するが、死去してしまった木部寅士を解釈するためには重要な鍵を与えられたというべきである。酌人が来て賑やかな酒席になり、話題はまったく別のものになったが、その酌人の不在のときふと訊いた細君についての質問に対する木部の返事は、馬座にその質問を後悔させた。

「あいつはね、姦通していやがったんだ。別れたがね。」

馬座は口を閉じ次の言葉を待ったが、木部の方も口をつぐみ酌人がもどって来るまで重い沈黙がつづいた。

あとになって馬座は、木部のその言葉を噛みくだこうと努力をかさねた。はるか何十年かの過去に同じ言葉を木部から聞いたことのある馬座とすれば、ふたつの場合をかさねて考えてみずにいられなくなるのは当然であつた。ふたつの場合、事態は同じだが、与えた印象はちがっている。

前のときは、その場にいる者たちに呼びかけるかのごとき印象を与え、事実そう思われる結果をもたらした。木部は十分千瑛子を意識し、結婚にまで進展したのだからそれが木部の目的だったとも受けとれる。明石幸江の姦通が事実であつたか否かは、今もって馬座のたしかめ得ないところだが、あるいは木部の虚言づくりごとともいえるのである。その点からだけいえば、後の場合は誰もいない、馬座以外に聞き手はいなかった。それならば、今度の告白は真実とすべきか。

馬座には解きがたい謎として残った。

この問題について話し合い、検討し合つて疑問を解きすこしでも真相に近づこうとする協力者を求めるとすれば、稲村ヶ崎で木部と同座した竹田以外にいないと思う馬座であつた。ところが、その竹田もすでに故人であつた。木部に先立つこと半年、前年秋入院手術をした甲斐もなく癌で死去してしまつたのである。こ

れも馬座にとっては不意打で、馬座が伊豆の温泉病院に入院中見舞いに来てくれたときは、そんな気はいを全く見せなかった竹田であったから。逗子に住んでいる竹田がわざわざ伊豆まで来てくれたのは五月はじめの連休のまんなかの日であった。

「勤め人は休みが三日もつづくと、身を持てあましてしまうよ。」

勤務先の新聞社は定年でやめたが、ある通信社に籍をおいている竹田は、わざわざ伊豆まで来たのを見舞のためだけではないと弁解じみた云い方をした。わざわざ見舞に来たとなれば、病人の神経にさわりはしないかという心づかいの持主で、同じような神経を持っている馬座にはその心づかいがわかりすぎるほど伝わって来た。

その年の夏の末退院して自宅療養にうつった馬座は、秋になって竹田が胃潰瘍手術のため東京の病院へはいったことを知ったのだが、見舞に行けるからだの状態ではなかった。竹田は一度退院し、翌年つまりことし今度は鎌倉の病院にはいり、そこで死去したのであった。竹田の死去は馬座にはげしい衝撃を与えた。この長いつきあいの友人が、最後に逢った伊豆の病院へ見舞に来てくれた日、まるきりそんな気はいを見せなかったのを思い返すと、もっと話し合うことがたくさんあったのである。

木部寅士の死を知ってそのとたんにおそわれた口惜しさも、その心残りのひとつで、ついにそのチャンスを逸してしまった自覚は、取返しのつかない失策だったと馬座を苦しめた。稲村ヶ崎での木部の告白と四十年近い歳月をへだてての同じ意味の告白とを二重焼にして検討できる相手は、竹田のほかにいる筈がないのである。しかし、それを求めることのできない今日としては、過去は過去として葬れと瞑目するよりは仕方あるまい。木部の死去によって触発された竹田の死去についての想いは、過去を掘りかえすことの無駄という諦めにつながった。

しかし、触発されたのはそれだけではなかった。田浦の口から出た「プレイボーイ」が木部寅士という男の本質を考えさせる素因になったのである。竹田と語り合いたい願望を起こしたのも、それが目的であった。木部ははたして「プレイボーイ」と呼ぶべき素質の持主だったろうか。馬座は一度きり逢ったことのない二人の妻を含めて四人の彼の妻を知っている。そのうちのふたりが彼を裏切ったというのは、それが事実とすれば、どういう解釈を与えるべきであろうか。木部が飽きっぽい良人で、裏切りはその反応だったと云い切ってしまえば話は簡単になる。が、果してそれで満足できる結論になるだろうか。そういう妻を持った木部の不幸と考えてみても、肯くわけに行かない。女とはみんなそんなものさと悟

ったみたいなことをいうのは、尚更である。

馬座は二度目の妻を求めるときの木部の情熱を胸に描き出してみた。盛夏の炎天下撮影所へ明石幸江を訪ねた日のことは、今でも目にあざやかに残っている。あの幸江がほんとに裏切ったのか否かはもはや真偽を探り得ないにちがいないが、木部が疑いを抱き苦しんだことだけは、すくなくとも真実であったろう。してみれば、と馬座は最初の妻について想いをさかのぼらせた。すると、町の肉屋の小僧の言葉が耳によみがえった。――夜中に二度も三度も氷を買いに来たんだよ、よっぽど惚れていたんだねえ。そこに見る情熱をほんものであったとすれば、彼は現在はやり言葉になっている「プレイボーイ」の資格の持主ではない。

馬座は木部と最後に逢った日を想いおこした。現在の不自由なからだになる前だから、数年前のある晩であった。町の小料理屋から電話で木部が来ていると知らせて来た。馬座の始終行く店で、木部については幾度もしゃべっているのを聞いているお上の機転であった。ハイヤアを呼んで駆けつけると、連れを帰した木部がひとりで飲んでいた。

「よう。」

馬座が顔を見せると、木部は目尻に笑い皺を寄せてうなずいた。このころは始終逢っていたわけではなかった二人だが、顔を合わせればすぐ心持が通じ合った。いろいろの話題をむしかえすと、馬座があざやかにおぼえている話をたびたび忘れてしまったと首をかしげる木部だったが、その話のなかにはこの前馬座の家で馬座がメモを取ったときはおぼえていたものもあって、馬座をふっと寂しがらせたりした。ふたつきり年長ではないのに、衰えをかんじさせる木部であった。

深更、木部は大船の家へタクシーで帰って行った。その家は死去した家なのだが、馬座はその家にどういう家族と住んでいるのかとうとう訊くことを控えてしまった。極楽寺で逢った妻と別れたと聞いていたことが、咽まで出かかっている質問を遠慮させたのである。帰って行くタクシーまで送って出た馬座は、

「また逢おうぜ。」

と、車窓を覗きこんだ。しかし、その約束を果さないうちに馬座は病院生活をするからだになってしまった。そのとき、木部は馬座にむかって、

「ウン。」

と、胸を折るみたいな姿勢でうなずいた。そして目尻に笑い皺を寄せたのが、馬座の目に焼きつき彼の死後も生き生きと残っている。

\*この『プレイボーイ』は、今井達夫が交友の深かった国木田虎雄をモデルに書いた作品で、今井達夫が馬座英介、国木田虎雄は木部寅士として登場する。今井は国木田没後、国木田虎雄についての一文を毎日新聞に寄せている。

「この名前をご存じのかたは、今となれば随分すくなくなっただろうが、独歩の長男と紹介すれば、ああとうなずいていただけるであろう。

彼が鎌倉の寓居で死去したのは、おとしの晩秋だから、もう一年半になる。私より二歳年上の彼とは、たがいにハイティーン時代からの友人で、つまり、きっちり五十年のつきあいであった。彼と知り合ったのは大正十年春で、そのころ彼は福士幸次郎の楽園詩社の同人として詩を書いていた。

文字をえらぶことに全神経を集中し、彫琢をきわめたその美しい詩は、「新潮」誌上にしばしば掲載され、ついには大正十一年には「鷗」と名づけた詩集一卷となって上梓、これも新潮社発行であった。独歩の最後の病床につきそっていた中村武羅夫が「新潮」を担当していたからでもあったろうが、その信頼に十分こたえ得る作品であった。

楽園詩社の仲間にはサトウハチロー、永瀬三吾などがいて、その連中とも親しくなった私は、よく国木田の消息を訊かれたものだ。そういうとき私は表情を硬くして答えた。

「ああ、彼は現在、藤沢精神病院にいるよ」

すると、みんな一様にぎょっと顔いろを変え、いたましそうな表情になる。そこで私は微笑をうかべる。

「つまり、その病院の看護長のポストにいて、給料をもらっているんだよ」

みんなその途端にホッと緊張を解くが、入院しているとうけとっても不思議はない、するどくデリケートな神経の持主だった若いころの彼である。この話はもちろん戦後昭和三十年代のことだが、彼はその病院に十年つとめて退任した。

「鷗」以後、関東大震災後には詩から小説にかわり、幾つか発表した。文筆生活から遠ざかったのちの彼は、思想的につきつめていたように思う。彼については五十年の思い出がかさなっていて、容易に書き切れるものではない。ここでは遅ればせながら追憶の心持を表すのみである。」

1972(昭和47)年4月20日『毎日新聞』「茶の間」欄



\* 今井達夫は国木田虎雄について著書『鵠沼物語』（鵠沼を語る会発行）のなかでも、かなり多く取り上げている。この書は大正、昭和の時代に鵠沼に出入りした文士や画家たちの行動を克明に描写している。

\* 2007(平成 19)年から 18 回に亘り今井達夫遺稿を会誌『鵠沼』に掲載してきましたが、今号の『プレイボーイ』（後篇）を以て終了とします。

#### 今井達夫遺稿掲載一覧

|                |                       |
|----------------|-----------------------|
| ①『遺言書』         | (第 94 号 2007 年 3 月)   |
| ②『秋の蛇』小説       | (第 95 号 2007 年 9 月)   |
| ③『相州大山豆腐塚』     | (第 97 号 2008 年 9 月)   |
| ④『香煙の壁』小説      | (第 98 号 2009 年 3 月)   |
| ⑤『指の輪』小説       | (第 99 号 2009 年 9 月)   |
| ⑥『花卉の虚』小説      | (第 101 号 2010 年 9 月)  |
| ⑦『南天の赤い実』      | (第 102 号 2011 年 3 月)  |
| ⑧『鵠沼物語』草稿？     | (第 103 号 2011 年 9 月)  |
| ⑨『家犬三代記』       | (第 104 号 2012 年 3 月)  |
| ⑩『望郷』          | (第 105 号 2012 年 9 月)  |
| ⑪『散歩の出来る街』     | (第 106 号 2013 年 3 月)  |
| ⑫『五百阿羅漢』       | (第 107 号 2013 年 9 月)  |
| ⑬『耕二郎の老年』      | (第 108 号 2014 年 3 月)  |
| ⑭『死者来訪』        | (第 109 号 2014 年 9 月)  |
| ⑮『ヘビとの長いおつきあい』 | (第 110 号 2015 年 3 月)  |
| ⑯『幻聴』          | (第 112 号 2016 年 3 月)  |
| ⑰『プレイボーイ』前篇    | (第 113 号 2016 年 11 月) |
| ⑱『プレイボーイ』後篇    | (第 114 号 2017 年 4 月)  |

#### 鵠沼を語る会の冊子

|            |                    |
|------------|--------------------|
| 『馬込文学村二十年』 | (2012 年 10 月 31 日) |
| 『鵠沼物語』     | (2014 年 3 月 31 日)  |
| 別冊『鵠沼』     | (2004 年 3 月 8 日)   |

# 「鵜沼を語る会」活動の記録

(平成28年11月～平成29年3月)

平成28年12月例会          12月13日(火)      10時～12時                  14名出席

司会進行 綿谷会員

— 会誌113号配布、『安岡章太郎展』の見学報告、新年会の案内をした。

『お話』— 「鵜沼海岸のサーフィンの歩み」 会誌113号掲載記事を基にスライドを使って筆者の内藤会員が話をされた。

12月運営委員会          12月20日(火)      10時～12時                  6名出席

平成29年新年会          1月10日(火)      13時30分～16時              19名出席

例会なしで新年会のみとし場所は新たに鵜沼海岸商店街の「デイズ鵜沼」で行なった。岡田会員の音頭で乾杯、恒例のビンゴゲームを楽しみ、森岡会員の一本締めでお開きとした。

1月運営委員会          1月31日(火)      10時～12時                  8名出席

2月例会                  2月14日(火)      10時～12時                  16名出席

司会進行 中島会員

— 新年会の報告、会誌114号の進捗状況の報告がされた。

『お話』— 「昔の鵜沼の電話事情について」(本号に詳述)  
資料およびスライドを使って有田会長が話をされた。

2月運営委員会          2月28日(火)      10時～12時                  8名出席

3月例会                  3月14日(火)      10時～12時                  20名出席

進行役 岡田会員

— 会誌114号進捗状況の報告、来年度事業計画の提案募集、湘南白百合学園小学校への森岡会員による出張授業の報告がされた。

『お話』— 「若尾山公園と若尾幾造」(会誌113号掲載)について新たな資料も加え、筆者の小池会員が話をされた。

3月運営委員会          3月28日(火)      10時～12時                  9名出席

3月在籍会員数 50名      新会員 神谷裕太さん(2016.9) 笠羽巳年子さん(2017.3)

(書記 佐藤弘)

## 編集後記

- 三月も後半、日差しは春らしい輝きに充ちているのに風が冷たい。今頃の富士山は一年を通じ雪が一番深い。鵜沼の海から眺めると裾まで真っ白。それでも季節は移り変わり、間違いなく春が来る。今号が出来上がる頃には桜が見ごろになるだろう。▽内藤会員の「お供から始まった江ノ島の釣り」は、太公望の父親の薫陶を受けた筆者の父親と幼稚園児のころから通った江ノ島の海への思いが満載。古い江ノ島のことや、いろいろな漁の仕方について詳しく触れており学ぶことが多々ある。▽今号のレイアウトは全体のページ割りやテキストと写真・図の組み合わせで難儀、久しぶりに夜中までの作業が数日続いた。(弥)
- 森銑三の「鵜沼海岸雑筆」は昭和20年代の鵜沼在住の知識人・文化人・芸術家らとの濃密な交際の思い出が書かれていて興味深い。それは深く高い教養の共有があったからだろう。この時期、長谷川巳之吉、林達夫らが発案し、地元の文化人を講師に湘南学園講堂で開いた「鵜沼夏季自由大学」も、各人が手弁当の無料奉仕で参加した文化活動だった。ただ、森と林は、交流があったかどうかは不明である。当時、鎌倉でも吉野秀雄らが「鎌倉アカデミア」(鎌倉大学校)を開設した。吉野は丸山久子とともに「神楽舎(ささらのや)」で松岡静雄の薫陶を受けた人である。▽創立30周年記念企画として編纂した『鵜沼ゆかりの文化人』は短期間で作った故もあって、漏れた人物も多い。越谷達之助も忍節子もそうである。また宗教・スポーツ・政財界は対象から外している。2020年、東京オリンピックの年は当会の創立45周年になる。それを目指して増補改訂版を編纂してはどうか。今から準備をしたらいかがであろう。(岡田)
- 会誌114号を予定通り発行できそうだ。前号が2ヶ月遅れだったので今号の原稿の集まり具合が気になっていた。昨年の暮れどころか新年会の頃になっても一向に動きがなく、ようやく2月末から原稿が集まり始め何とか予定通り発行できる見通しがついた。多くの会員が印刷原稿の校正に関心を持ち、作業はスピーディーに進んでいる。製本作業にはもっと多くの会員が参加することを期待している。▽拙稿「鵜沼通信事情」は以前から手元にあった資料を一遍整理、公開しておこうとしたものであり、急に調査したものではない。藤沢、鎌倉方面も入れるか迷ったが今回は鵜沼に絞ることにした。▽内藤会員が20数ページにわたり江ノ島の釣りのことを書かれているが、釣りについての知識の豊富さに舌を捲き、懐かしい用語に昔に思いを馳せ、多くを教えられた。(有田)

『鵜沼』 第 114 号  
平成 29 年 3 月 31 日発行

本誌の記事引用の際は  
ご連絡ください

編集・発行 鵜沼を語る会  
藤沢市鵜沼海岸 2-10-34  
鵜沼公民館内  
電話 0466-33-2002

URL <http://kugenuma.sakura.ne.jp/>